

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.164

2007年1月

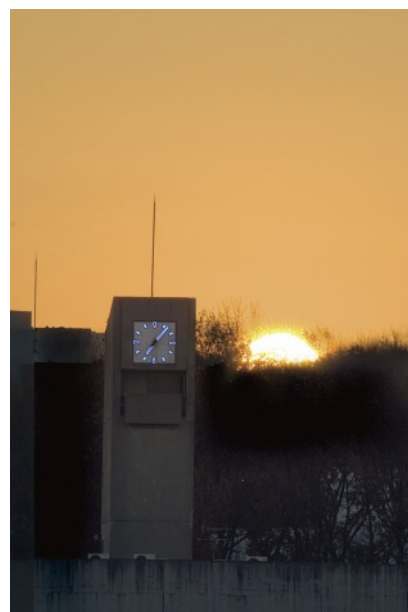
平成19年 平野総長年頭あいさつ「新年を迎えて」



目次

●年頭あいさつ	
平成19年 新年を迎えて ―厳しい環境の中で大学の使命を果たす―	3
●ニュース	
第4回名古屋大学東京フォーラムを開催	8
高等研究院フォーラム2006を開催	9
柘植総合科学技術会議議員が本学を視察	10
豊田講堂改修・増築工事起工式を挙げる	11
第2回国際業務トレーニングセミナーを開催	11
第10回経営協議会を開催	12
永年勤続者表彰式を挙げる	12
平成18年度個人情報保護に関する教育研修会を開催	12
人事・労務担当者業務研修を実施	13
OJT 実施者研修を実施	13
第2回人事交流者懇談会を開催	13
講演会「大学における環境安全管理体制の確立に向けて」を開催	14
●知の未来へ	
GPS 電波を使った電離圏の観測 大塚雄一（太陽地球環境研究所助手）	15
●知の先端	
ホウ素系電解質を用いた選択的なリチウムイオン輸送	16
松見紀佳（大学院生命農学研究科助教授）	
メタボリックシンドロームに対する運動療法	18
押田芳治（総合保健体育科学センター教授）	
●教育のデザインとプラクティス	
地震防災教育の実践	20
林 能成（大学院環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助手）	
●学生の元気	
大学生が発信する地震防災 「たのしく防災」	22
西村 健（工学部社会環境工学科4年）	
体育会会長表彰式	23
●部局ニュース	
「環境学研究科創設5周年記念式典及び同附属交通・都市国際研究センター設立記念シンポジウム」を開催	24
「プラズマナノ工学研究センター設立シンポジウム」を開催	25
21世紀COE プログラム「統合テキスト科学の構築」国際研究集会を開催	26
国際シンポジウム「国家・社会の変容と法改革」を開催	26
第2回感覚設計国際シンポジウムを開催	27
情報系 COE が「第4回社会情報基盤のための音声・映像の知的統合シンポジウム」を開催	27
留学生のための就職支援セミナー（第3回）を開催	28
テレビ会議を通じた海外実地研修報告会を実施	28
講演会「高病原性トリインフルエンザについて」を開催	28
第12回理学懇話会「生命の『核』を衝くーX線でみるタンパク質の動的構造ー」を開催	29
ノーベル物理学賞受賞 Gerardus't Hooft 教授一般講演会を開催	29
「第8回まちとすまいの集い」を開催	30
大学院学生主催の国際学会「FeedForth 2006」を開催	30
「ボクのワタシの秘密基地づくり」を開催	31
公開講演会「人工衛星から雲と雨を観る」を開催	31
地球水循環研究センターがユネスコ IHP 研修コースを実施	32
シンポジウム「新材料による電気機器の革新」を開催	32
第60回招聘セミナーを開催	33
第2回東海地区 CSI 事業報告会を開催	33
企画展「西洋の発見ー幕末・維新期の遣外使節と留学生達ー」を開催	34
「ナメクジウオ類の進化のなぞに迫る」を開催	34
博物館が秋の野外実習を実施	35
博物館が第65回特別講演会を開催	35
附属農場 動物場で動物慰霊祭を実施	36
ICCAE 2006年度第6回オープンセミナーを開催	36
●名大を表敬訪問された方々 平成18年9月16日～12月15日	37
●受賞者一覧 平成18年9月16日～12月15日	38
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成18年11月16日～12月15日	41
●INFORMATION	
名古屋大学環境報告書2006を公表	45
●イベントカレンダー	46
●ちょっと名大史	
後藤新平の自筆書掛け軸ー後藤と愛知医学校教師柴田邵平ー	48

平成19年 新年を迎えて ―厳しい環境の中で大学の使命を果たす―





総長 平野 眞一

名古屋大学の役職員はじめ構成員の皆様、学内外の関係者の皆様、新年明けましておめでとうございます。皆様それぞれ新年での発展を期して、よい年を迎えられたこととお慶び申し上げます。

平成16年4月に法人化されてから、3年目の新年を迎えましたが、この間の構成員の皆様の大学運営に対するご協力とご理解に、また学外の皆様の温かいご支援に心より御礼申し上げます。運営費交付金の削減に加えて、病院関係での経営改善係数の負荷、診療単価引き下げなど、大学を取り巻く環境はますます厳しくなっております。教育・研究環境の充実さらに努めなければならない時期に、総人件費削減が求められ、構成員の皆様にご理解をお願いしなければならない状況を申し訳なく思っております。このような厳しい状況ではありますが、名古屋大学が目指す「優れた研究の創造と将来を担う豊かな人間性を持つ勇氣ある知識人の育成を通して社会に貢献する」という使命は不変であり、構成員の英知を結集して使命を果たさねばなりません。

社会環境は混迷の度合いを深め、我が国の将来を担う若者社会にも悪影響を及ぼしていると感じております。このようなパラダイムシフトにあって、大学も無関係ではいられないことは確かであります。時代性からくる学生達の新たな問題の解決は、鎮痛剤のような一過性の方策では事足りるものではありません。「何を」をもって解決の根本とすべきなのか。私は、このような時代において、その解決の糸口となるものは「正しき教育」の実践以外にないと信じています。ここで、あえて「正しき教育」と表現したことには私なりに意味があります。それは「教育」に対する

世界共通の認識、規範といっても良いと思いますが、カオスを「調和と共生」へと変革させるための最も重要なソフト・パワーは「教育」であることです。と同時に「教育」は経済至上主義や一国繁栄主義的ナショナリズムの道具となりうる危険性も孕んでいることを警告するとともに、「教育」をこれらエゴイズムに手渡ししてはならないことを含んでいます。

また、「教育」において学問・科学が迫られている課題はいよいよ明確になっています。急速に発達してきた科学技術は、人類の福利という「光」とともに、その生存を脅かす「影」をももたらしています。したがって、「光」の面を進展させるとともに「影」の面を制御し、全地球規模での持続可能な発展を図ることが課題であり、その実現が責務であると考えます。私は、大学はこのような人類史的課題の解決を担う「知の拠点」として、その活動を展開することが求められているものと認識するが故に、今こそ「教育」の重要性を大学人は自覚すべきと考えるのであります。

私は、かねがね「学」は「Humanity」そのものであると事あるたびに述べてきています。ここにいう「Humanity」を直訳すれば「人間性」ということになるでしょう。ただ、私が意図する「人間性」の意味を言葉で表現することは、ひどく難しくある種のもどかしさを禁じ得ませんが、あえて言うならば他者に尽くすことを価値とすることが「人間性」の本質であると言えるのではないかと思います。つまるところ大学における教育とは、優れた人間性を有する教育者集団によって、「物質的・経済的側面に偏ることなく、精神的・文化的側面にも充実したバランスの取れた人間性ある豊かな知の担い手」を育てることにあると思っています。

また、産業界の方々からもよく言われることですが、大



第1回名古屋大学国際アドバイザリーボード



こすもす保育園

学教育で培って欲しいひとつに「コミュニケーション能力」があげられています。現代社会の環境が若者達に及ぼしている悪影響の問題はさておき、将来を託する若者達のことを考えるとこの問題の解決は避けて通れません。我が国が目指す「科学技術創造立国」のための重点開発としてライフサイエンス、IT、環境、ナノテクノロジーがあげられていますが、そのうち特にITの劇的な発展は、グローバルにそして自由に情報を伝達しあえるという便利さのかたわら、ともすれば人間の存在さえバーチャル化させるとともに、生身の人間と人間との会話が閉ざされていく方向に向かっている感があります。つまり「コミュニケーション能力」というよりも、他者を認めるとの認識から成り立つ「対話」する能力の欠如といわざるを得ない側面があります。

したがって、私ども教育者はいくら授業形式が「対話」型になっていても教育者自身が常に自己啓発に努め、「学」が「Humanity」そのものであることを十分自覚していかなければ解決し得ない課題と考えています。また、大学は何かと評価と競争に晒されていますが、それを理由として、学問分野別組織の防衛を優先するために恣意的な教育改革が行われるなど、大学自身が「組織」を防衛するがあまり、自らが「教育」を破壊してしまうことだけは断じてあってはならないと決意しています。そのためにも教育者たるものの「資質」については常に自身の問題として問いかけていかなければならないと痛感しています。

社会自体も「教育」の重要性を再認識し、教育を教育機関に委ねるといった消極的な風潮から、社会全体が「教育」のために何を為すべきかを問う時代にならなければならないと考えております。

本年は、大学の基盤づくりをいっそう推進する重要な年です。教育・研究環境の充実のための基盤となる運営費交付金の確保に努めるのは当然ですが、同時に

教職員が危機感をもって、一丸となって競争的資金の獲得にも努めなければなりません。大学の将来を見据えた基盤づくりに一緒に活動していきましょう。限られた中からではありますが、大学院博士課程後期課程の学生の支援のために本年から新たに奨学制度を設け、また学生の教育環境の改善、福利厚生の実施にも努めていきます。また一方、国立大学法人に対しては、機関別認証評価、法人評価をうけることに加えて第2期中期目標・計画の提出に向けた準備が求められています。これらは大学の存在にも関することですので、皆様のご協力、ご支援を重ねてお願い申し上げます。

ここでは年頭に当たり、昨年の本学関連の主な動きを振り返り、さらなる大学の教育・研究・社会貢献の進展を期したいと思います。

○本学の学術研究・教育の更なる充実を図るため、総長の諮問機関として、ノーベル賞受賞者3名を含む国内外の著名な学識経験者で構成する国際アドバイザリーボードを設置しました。第1回を2月に開催し、高等研究院の研究活動全般、若手研究者の研究等について様々な意見をいただきました。7月には、野依議長から報告書をいただき、その中で、高等研究院の使命に対し、名古屋大学における特に優れた研究を認知すること、「最先端研究」及び「萌芽的研究」を支援すること、学術的交流及び国際的交流を触発、展開すること等々、様々な観点から提言をいただき、改善を進めております。また、第2回を10月に開催し、大学院教育のあり方について意見をいただきました。今後、郷議長から総長への提言として報告される予定です。

○4月には、学内保育所「こすもす保育園」を開園いたしました。本学では、全国の大学に先駆けてさまざまな男女共同参画への取組みを行ってまいりましたが、その中の大きなテーマの一つである仕事と子育ての両立支援に関



第3回 AC21国際フォーラム



ファミリーマート名古屋大学店オープンセレモニー

第2回名古屋大学国際アドバイザリーボード委員

委員氏名	現職	専門分野	備考
郷 通子 博士 (GO, Michiko)	お茶の水女子大学長	情報構造生物学・生物物理学	内藤記念科学振興賞受賞
イグナロ ルイス ジェイ 博士 (IGNARRO, Louis J)	UCLA 教授	薬理学	ノーベル医学・生理学賞受賞
池端 雪浦 博士 (IKEHATA, Setsuho)	東京外国語大学長	歴史学	アジア政経学会理事、Association for Asian Studies 会員
李 遠哲 博士 (LEE, Yuan Tseh)	台湾中央研究院院長	化学	ノーベル化学賞受賞
野依 良治 博士 (NOYORI, Ryoji)	理化学研究所理事長、名古屋大学特別教授	化学	ノーベル化学賞受賞
ロルフ シュトルナー 博士 (STÜRNER, Rolf)	フライブルク大学教授	民事訴訟法	元ドイツ民事訴訟法学会会長
ミシェル ザンク 博士 (ZINK, Michel)	コレージュ・ド・フランス副学長	文学	フランス学士院会員、国際学士院連盟フランス代表

し、学内保育所へのニーズが非常に高いことを受け、検討を進めた結果、開設されることになったものです。保育園が男女共同参画の推進とともに、この小さな園から世界に羽ばたく子が育っていくことを期待しております。

○7月には、第3回 AC21国際フォーラムが、「グローバルエデュケーション～21世紀における大学」を主なテーマとして、イギリス ウォリック大学において約500人の参加者をえて開催され、高等教育のグローバル化の現状と対応および産学連携のあり方について意見交換をし、また本学がすすめる国際学術コンソーシアム21 (AC21)の活動への理解が増進されました。次回は、2008年に名古屋で開催することが決まりました。本学の国際交流のあり方を含めて、構成員の皆様のご理解とご支援をお願いします。

○7月には、旧文科系自動車車庫のスペースを学生、教職員の福利厚生施設として活用すべく、ファミリーマート名古屋大学店をオープンいたしました。この店は、学生、教職員の福利厚生のみならず、商品の流通、物流、情報システム等についての「生きた」データを収集し、教育・

研究に役立てることが可能であり、産学連携としての今後の発展が期待されております。

○9月には、名古屋大学消費生活協同組合からのご支援もいただき、旧第1理科系食堂を改築して一部竣工していた理系の書店とカフェテリアを併せて、食堂が一体化した「フォレスト」が新たにオープンしました。



フォレスト



名古屋大学日本法教育センターを開設（モンゴル）



第2回名古屋大学ホームカミングデイ



赤崎記念研究館



豊田講堂改修・増築起工式

○9月7日には、モンゴル国立大学内に、名古屋大学日本法教育研究センターを開設いたしました。本学の中央アジア諸国、モンゴル国との真摯でかつ継続的な交流は、東京で開催された中央アジア外務大臣会議においても高く評価されております。なお、本年9月には、ベトナムハノイ法科大学内に日本法教育研究センターを開設する予定です。

○9月30日には、卒業・修了生、学生、学生のご家族、地域の方々等に、本学の教育・研究の活動状況などを紹介するとともに、本学構成員との交流の場を提供し、本学の活動を理解してもらうことを目的として、第2回ホームカミングデイを開催いたしました。今回は全学挙げての取組みとして、行事当日を教職員の出勤日といたしました。同窓生や学生の家族を中心に、約4,000名の方々が参加してくださいました。今回は準備期間が短かったために、日程調整などで構成員の皆様にご迷惑をお掛けしましたが、学外の方々からも期待されておりますので、本年は十分な準備の上に開催したいと思っております。

○10月20日には、高輝度青色発光ダイオードを世界に先駆

けて実現した赤崎特別教授の研究業績を称えらるとともに、学術創生の重要性を後世に伝え、本学における独創的かつ先進的な科学技術研究を推進する産学官連携拠点として建設した「赤崎記念研究館」の竣工記念式典を行いました。先生のご業績は、いま叫ばれているイノベーションの真のモデルでもあります。第二、第三の赤崎先生が育つことを期待しております。

○11月29日には、念願であった豊田講堂改修・増築工事の安全を祈念する起工式を行いました。これは、名古屋大学創立70周年記念事業の一環としてのトヨタ自動車をはじめとするトヨタグループ企業の多大なご支援によるものです。心より感謝するとともに、本学の誇るシンボルとして大切に維持することをお誓い申し上げます。

○教育・研究の効果的な推進のために、本学では必要な組織改革を進めておりますが、国が認める大学附置研究所としてエコトピア科学研究所が昨年4月1日に発足いたしました。この研究所が、持続可能な社会の構築に向けて、全学の英知を結集する研究組織として発展することを期待しております。また、教育・研究の使命を達成するために自主・自律的に組織改編することが可能になった法人化のメリットを生かして、本学の研究科内に以下の研究センターを組織化いたしました。

- ・理学研究科附属南半球宇宙観測研究センターの設置 (H18.4.1)
- ・環境学研究科附属交通・都市国際研究センターの設置 (H18.4.1)
- ・情報科学研究科附属組込みシステム研究センターの設置 (H18.4.1)
- ・工学研究科附属プラズマナノ工学研究センターの設置 (H18.10.1)

これらのセンターが、所期の目的を達成し、研究の推進を通して社会貢献においても重要な役割を果たすことを期待しております。



エコトピア科学研究所設立記念式典



名古屋大学基金パンフレット

平成18年度科学技術振興調整費新規課題一覧

プログラム名称	課題名称	総括責任者・代表者
先端融合領域イノベーション創出拠点の形成	分析・診断医学による予防早期医療の創成	総括責任者：平野眞一総長 代 表 者：本多裕之工学研究科教授
若手研究者の自立的な研究環境整備促進	名大高等研究院研究者育成特別プログラム	総括責任者：平野眞一総長 代 表 者：芝井 広高等研究院教員
重要課題解決型研究等の推進	伊勢湾流域圏の自然共生型環境管理技術の開発	代 表 者：辻本哲郎工学研究科教授
アジア科学技術協力の戦略的推進	バイオウェイストのリファイナリー型資源化	代 表 者：長谷川達也エコトピア科学研究所教授

○教職員の皆様の努力のお陰で、科学研究費助成金などの競争的資金に加えて、「科学技術関係人材のキャリアパス多様化促進事業」、「若手研究者の自立的な研究環境整備促進」、「先端融合イノベーション創出拠点の形成」などの大型事業が採択され、プログラムをすすめることが出来るようになりました。全学を挙げてこれらの全学的な事業の推進に努めたいと思います。

また、さらに本年からいわゆる「グローバル COE」や「世界的研究拠点トップ30」などの重要プログラムが動き出します。改めて、教職員の皆様の意識を喚起したいと思います。

概算要求につきましては、厳しい環境の中でありながら、皆様の大変なご尽力のおかげで、特別教育研究経費の新規事業として、法科大学院、発達心理精神科学教育研究センター、地球水循環研究センター、生命農学研究科の事業が認められました。また、施設関係では、平成18年度補正予定事業で、改修工事として、全学教育棟Ⅱ期、工学部3号館Ⅱ期、理学部C・D館が、新営工事として、医学部基礎研究棟、保健学科校舎が、また、耐震改修として、古川記念館、工学部6号館、地球水循環研究センター本館、大幸体育館が認められました。皆様のご努力に感謝いたしますとともに、20年度におきましてもさらに努力していきたい

と考えております。

終わりに当たって、皆様方に重ねてのお願いがあります。冒頭で述べましたように厳しい環境の中にあっても、社会から託され、期待されている本学の使命は不変であり、この理念を達成しさらに飛躍しなければなりません。そのため大学独自の基金を持ち、学生育英事業、教育・研究環境整備事業、国際交流事業はじめ産学連携や社会貢献活動の充実・発展に努めたいと思っております。このたびの大学創立70周年事業の一環としての「名古屋大学基金」にお力添えをいただきたくお願い申し上げます。

また、最近、教職員の皆様の負担が年々増えており、その解決策の一環として組織改革を進めておりますが、事務の合理化、簡素化にさらに努めてまいります。事務改善の意見箱、大学の運営についての建設的なご意見を寄せていただきたく対応しております。建設的なご意見をお出しください。

今後、構成員の皆様、学内外の関係者の皆様のご理解、ご協力を得て、質の高い教育・研究を通して社会に貢献できる世界に冠たる大学を目指して前進することを所信として年頭の挨拶とさせていただきます。

第4回名古屋大学東京フォーラムを開催 －ものづくり中部の未来像－

第4回名古屋大学東京フォーラムが、12月12日(火)、東京都千代田区の経団連会館において開催されました。

このフォーラムは、ものづくり中部の「知」の拠点である本学の研究シーズ等を広く産業界に発信し、産業界との多面的な交流を活発化させるとともに、産業界との広域なネットワークを構築していくことを目的としており、今回は、日本経済新聞創刊130周年企画「日経ビジネスクリエーション塾 名古屋大学東京フォーラム」として、日本経済新聞社との共催、全学同窓会の後援により開催されました。

フォーラムでは、平野総長からの主催者あいさつの後、来賓として結城章夫文部科学事務次官より「今年度から始まった第三期科学技術基本計画、現在国会で審議中の教育基本法改正案等において大学に対する期待は大きく、名古屋大学においても、さらに産官学連携を通じて我が国の国際競争力の強化に寄与することを期待する」旨、あいさつがありました。

引き続き、丹羽宇一郎伊藤忠商事株式会社取締役会長による「魅力あるイノベーション・センターへの道－“人”と“技術”の拠点－」、内山田竹志トヨタ自動車株式会社代表取締役副社長による「産学連携の課題と期待」の2つの基調講演が行われました。

その後行われた本学研究者による講演では、馬場嘉信工学研究科教授が「ナノ・バイオ融合技術による予防早期医療創成－手のひらに名医・大病院－」、國枝秀世理学研究科教授が「X線反射望遠鏡を作る ナノメータの世界」と題し、研究内容をものづくりの視点から紹介しました。ま



研究シーズ展示コーナーの様子

た、29テーマの研究シーズを展示するコーナー、展示内容を具体的に紹介する説明会も併せて行い、参加者と研究者が活発な議論を交わしました。

17時30分からは、企業関係者と本学関係者との産学連携交流会が開催され、箕 哲男三洋化成工業株式会社取締役会議長・全学同窓会関西支部長の発声で乾杯があり、参加者は終始和やかな雰囲気の中、歓談していました。

今回は、一般参加者、全学同窓会関係者、本学関係者併せて約400名の参加があり、参加者からは、「時期を得た基調講演や一般にも分かりやすい研究紹介があった上、東京での開催はインパクトがあって良かった」等の声が聞かれました。



あいさつする平野総長



あいさつする結城事務次官



講演する丹羽伊藤忠商事(株)会長



講演する内山田トヨタ自動車(株)副社長

産学連携フォーラム名古屋大学



交流会であいさつする箕三洋化成工業(株)取締役会議長

高等研究院フォーラム2006

「公正な科学研究に向けて－業績評価と研究倫理－」を開催

高等研究院フォーラム2006が、12月5日(火)、シンポジオンホールにおいて、学内外の研究者、学生、一般の方々など約100名の参加を得て、開催されました。

本フォーラムは、高等研究院教員を中心に、特定の研究テーマに主眼を置き、研究成果を広く学内外に発信するため年1回程度開催するもので、今回は、同院と本学公正研究委員会の主催により、高等研究院研究者育成特別プログラムの発足を記念して催されました。研究費不正使用、研究データ捏造、研究費申請書不正記載等、公正な科学研究にもとる問題が数多く発生している昨今、研究者の研究倫理が大きく問われていることから、「公正な科学研究に向けて－業績評価と研究倫理－」をテーマにし、「研究不正問題の現状を明らかにする」、「この問題の背景・原因を研究者の業績評価、研究補助、研究環境との関わりで検討する」、「公正な研究に向けて研究活動・研究補助・研究倫理教育のあり方などいかなる対応を図るべきかを考える」といった課題について、多様な観点で論じながら今後の方向を見出す機会になるよう企画されました。また、本学が7月に制定した「名古屋大学における研究上の不正行為に関する取扱規程」、「名古屋大学公正研究責任者及び公正研究委員会に関する規程」をアピールする目的も兼ねました。

フォーラムでは、まず、平野総長、北住高等研究院長のあいさつの後、奥村隆平同院副院長を司会とし、4名のパネリストによる講演が行われました。最初に、浅島 誠東京大学大学院総合文化研究科教授（日本学術会議科学者の行動規範に関する検討委員会委員長）が、「日本の研究者は今、どのような状況にあるのか」と題し、「研究上の不正問題については、発生を未然に防ぐことが重要であり、そのためには、研究倫理教育や、研究者間の人間関係も含めた健全な研究環境の醸成に向けて、組織的な取組を継続的に展開することが求められる」と述べ、池内 了総合研究大学院大学教授が、「研究者のモラル・評価・社会的責任」と題し、「研究者は、『倫理責任』、『説明責任』だけでなく『社会的責任』も全うすべきである」と強調しました。続いて、佐古田三郎大阪大学大学院医学系研究科教授（同大学同研究科研究公正委員会委員長）が、「科学の本質とその社会における“営み”について」と題し、「『科学は私達にとって一体どんなものなのか』というところから出発し、社会との関係を議論する必要がある。科学の本質を知り、社会との関係を知ってこそ初めてその倫理について語るができる」と述べ、毎日新聞社科学環境部「理系白書」取材班記者の永山悦子氏が、「『科学者＝性善説』



会場の様子

のままでもいいのか」と題し、不正事件の具体例をいくつか挙げた上で、「研究者の『小さなズル』＝倫理的無感覚を生みだしかねない研究環境の密室性」に対して警告を発し、問題提起をしました。

これらの講演を受け、コメンテーターの濱田道代法学研究科教授から4名のパネリストの発言についてまとめが、岡本耕平環境学研究科教授から「名古屋大学における研究上の不正行為に関する取扱規程」、「名古屋大学公正研究責任者及び公正研究委員会に関する規程」についての説明があり、続いて、パネルディスカッションが行われました。

フォーラムに引き続いて行われた懇親会では、パネリストの方々に加え、学内外の様々な分野の研究者など多くの方々に参加し、活発に議論する姿なども見られ、大変有意義なものとなりました。



講演する浅島教授



講演する佐古田教授



講演する池内教授



講演する永山氏

柘植総合科学技術会議議員が本学を視察

柘植綾夫総合科学技術会議議員（元三菱重工業株式会社代表取締役・常務取締役）が、12月8日（金）、本学を訪問し、学内を視察しました。

総合科学技術会議は、内閣総理大臣及び内閣を補佐する「知恵の場」として、総合的・基本的な科学技術政策の企画立案及び総合調整を行うことを目的として、平成13年1月に内閣府に設置され、内閣総理大臣を議長とし、関係閣僚及び有識者14名で構成されています。

柘植議員は、本部1号館において総長、豊田理事、宮田副総長と懇談し、競争的資金の現状や今後の在り方等について意見交換を行った後、まず、工学部2号館において、佐藤一雄工学研究科教授から、21世紀COEプログラム「情報社会を担うマイクロ・ナノメカトロニクス」について、MEMS製造技術、マイクロ材料評価技術、微細機械デバイス／システム等に関する説明を受けました。次に、工学部3号館において、藤巻朗工学研究科教授から、21世紀COEプログラム「先端プラズマ科学が拓くナノ情報デバイス－連携研究による単一磁束量子集積回路開発を中心として－」について、単一磁束量子集積回路の設計技術等に関する説明を受け、次世代スパコンへの適用に関する将来的な見通し等について、質疑応答がありました。続いて、本年度竣工した赤崎記念研究館を訪れ、澤木工学研究科長の案内により、赤崎本学特別教授の研究業績や青色発光ダイオードの研究開発史等を紹介した1階展示室を見学しました。さらに、同研究館4階において、平成18年度科学技術振興調整費（先端融合領域イノベーション創出拠点の形成）に採択された「分析・診断医工学による予防早期医療の創成」について、現在の技術レベル及び今後の研究の見通し等に関する説明を受けました。最後に、IB電子情報館において、堀勝工学研究科教授から、文部科学省の実施する知的クラスター創成事業に選定された、愛知・名古屋地域の「ナノアセンブリングシステム開発」及びプラズマナノテクノロジーに関する研究について、説明を受けながら、実験設備を見学しました。

柘植議員は、視察した研究室すべてに大変興味を持った様子で、訪れる先々で、学生たちに気さくに声をかけられるとともに、活発な質疑応答・意見交換がなされ、予定視察時間を大幅に超過しましたが、いずれの研究についても、実用化への強い期待感を表明しました。



懇談の様子



藤巻工学研究科教授（左）から説明を受ける柘植議員（右）



実験設備を見学する柘植議員



赤崎記念研究館の視察
（右から、平野総長、澤木工学研究科長、柘植議員）

豊田講堂改修・増築工事起工式を挙行

豊田講堂の改修・増築工事起工式が、11月28日(火)、同講堂ロビーにおいて行われました。

同講堂は、1960年(昭和35年)、トヨタ自動車工業株式会社の寄附により建設され、世界的に活躍している建築家である榎文彦氏が日本において最初に設計し、株式会社竹中組(現在の榊竹中工務店)によって施工されたものです。

建設以来46年経った現在、老朽化が著しく、この度トヨタ自動車株式会社をはじめとするトヨタグループ10社の寄附により、初めての大規模な改修と約840㎡の増築を行う



起工式の様子



(左) 榎氏、(右) 平野総長

こととなり、今回の改修・増築も、榎氏が代表を務める株式会社榎総合計画事務所で設計され、株式会社竹中工務店により施工されることとなりました。

起工式には、榎氏をはじめ、(株)榎総合計画事務所、(株)竹中工務店の方々、本学からは平野総長をはじめ、大峯、杉浦、杉山の各理事の他、事務局内各部長等、多数参列し、工事中の安全を祈願しました。

工期は、平成18年12月から約1年間で、平成20年3月には新しくなった豊田講堂で卒業式が行われる予定です。今回の工事は、老朽化した建物を建設当時の姿に蘇らせることを基本としながら、ホールについては音響、空調、照明、座席等の性能強化、倉庫化していた地下階については、控室等の部屋として改修、また、シンポジオンとの間に屋根を架け内部化しホワイエ空間を創出する等、様々な改良が盛り込まれています。

第2回国際業務トレーニングセミナーを開催

事務職員を対象とした国際業務トレーニングセミナーが、11月24日(金)、法政国際教育協力研究センター(CALE)において、開催されました。2回目の今回は、「留学生・外国人研究者とのより効果的なコミュニケーションを目指して」と題し、本学事務職員をはじめ、他大学の教職員、国際教育交流協議会会員、学生等、延べ54名の参加がありました。

セミナー冒頭では、高木ひとみ留学生相談室講師が、参加者にリラックスした雰囲気の中で課題に取り組んでもらえるようにグループワークを行いました。セミナー第1部では、堀江未来留学生センター助教授が異文化コミュニケーション



グループワークの様子



会場の様子

ンについて講義及びグループ討議を行い、異文化コミュニケーションの状況においては価値観の多様性を念頭に置くこと、非言語の奥深い役割に注目すること、そして言語化することの重要性を認識すること、などについて話しました。第2部では、平井達也九州産業大学国際文化学部臨床心理学科専任講師が、相手が本当に伝えたいことを受け取るためのアクティブ・リスニングについて、受け身に取られがちな「聴くこと」に対する積極的意義を講義で明らかにした上で、参加者が3人1組となって話し手・聴き手・観察者を経験し、聴き方の手法から、聴き手の存在感や姿勢が話し手にもたらす影響までを広く実習によって確認しました。日常的に行っているコミュニケーションを振り返ることで、今後の業務においてどのように留学生や外国人研究者と接すればよいかを具体的に理解でき参考になった、という意見が参加者から多く寄せられました。次回の本セミナーは、1月下旬に「効果的な英文Eメール書き方のコツと実践」と題し開催する予定です。

第10回経営協議会を開催



経営協議会の様子

第10回経営協議会が、11月19日(日)、名古屋市内のホテルを会場として開催されました。

会議では、平野総長のあいさつの後、担当理事から、平成17年度に係る業務の実績に関する評価の結果、平成17年度決算の報告、平成18年度経営状況の報告、総人件費改革に対応する人員削減の基本方針、財政計画(案)、平成19年度概算要求についての説明が行われ、外部委員からは、業務実績評価のあり方、総人件費改革への対応方法等について、貴重な意見が寄せられました。

続いて、第2回名古屋大学ホームカミングデイ、大学教育改革支援プログラムの採択状況、第2回名古屋大学インターナショナルアドバイザリーボードの開催、平成18年度施設整備状況、名古屋大学基金の取組み、公正研究委員会の設置、赤崎記念研究館の竣工等について、担当理事から説明がありました。

次の経営協議会は、平成19年2月に開催する予定です。

永年勤続者表彰式を挙行



記念撮影

平成18年度名古屋大学永年勤続者表彰式が、11月22日(水)、シンポジオンホールにおいて挙行されました。

表彰式では、始めに平野総長から、被表彰者32名の内、出席した30名一人一人に対し、表彰状と記念品(銀盃)が手渡され、「名古屋大学あるいは様々な職場において、永年にわたりご尽力された皆様にお祝いを申し上げます。一昨年4月に名古屋大学は法人化し、皆様と一緒に努力してまいりましたが、ここまで来ることができたことに対し、皆様方に深く感謝しております。教職員が互いの役割と責任を自覚して、大学に貢献していただき、未来の名古屋大学が一層発展する基礎を一緒に築き上げていきましょう。今後のさらなるご活躍を心から期待しております。」との旨の祝辞がありました。続いて、被表彰者を代表して、河合博文施設管理部施設整備課第一建築掛長から、「名古屋大学の一員であることを誇りに思い、これからも職務に従事していきたい。」との謝辞と決意が述べられました。

平成18年度個人情報保護に関する教育研修会を開催



研修会の様子

平成18年度個人情報保護に関する教育研修会が、12月12日(火)、国際開発研究科多目的オーデトリウムにおいて開催されました。本研修会は、職員の保有個人情報の保護に関する意識を高め、適切な管理を行うため、昨年度から開催されているものです。

はじめに、竹内義則情報戦略室員が、平成17年度に策定された政府の情報セキュリティ対策のための統一基準を中心に、個人情報を含む情報全般のセキュリティ対策について講義を行いました。

次に、市橋克哉総長補佐が、独立行政法人等の個人情報保護法等に基づく個人情報保護に係る基本的な定義及び考え方について講義し、学内からの照会事例をまとめた個人情報の取扱いに関するQ & A、個人情報漏えい事例等について紹介しました。

研修会には、学内の保護管理者等約80名が出席し、講師の話熱心に聞き入っていました。

人事・労務担当者業務研修を実施



研修の様子

人事・労務担当者業務研修が、10月4日(水)から11月29日(水)にわたり、工学部7号館において、随時行われました。

本研修は、事務局、各部局の人事・労務担当者を対象に、法人化後、新たに必要となった労働法及び社会保険各法に関する知識の向上等を目的として実施されました。

全6回の講義の内、和田 肇法学研究科教授が労働法の講義を、社会保険労務士の位田達哉氏と神谷さつき氏が、社会保険に関する講義を担当しました。

労働法、社会保険に関する研修は、開催を希望する声が多かった研修の一つであり、人事・労務担当者にとっては、普段から業務と密接に関わる分野でもあることから、研修参加者は、メモを取りながら各講師の講義を熱心に聴講していました。

OJT 実施者研修を実施



真剣に実習に取り組む参加職員

名古屋大学 OJT (On the Job Training) 実施者研修が、11月21日(火)、11月22日(水)の2日間にわたり、文系総合館カンファレンスホールにおいて実施されました。

本研修は、各部局から推薦された掛長、専門職員を対象として行われ、部下に仕事を通じて必要な知識、技術、取り組み姿勢等を身に付けさせるための指導方法を学ぶことで、組織として健全な職員育成を図ることを目的として、今年度初めて実施されたものです。

今回は、株式会社エム・ズの佐野愛子講師を招き、「コーチング」を中心とした講義を行いました。コーチングとは、個人の能力やモチベーションを最大限に発揮できるよう支援し、最短の時間で成果が上がるようサポートしていく技法です。研修は、講義、実習とも参加者に飽きさせない工夫が随所に見られました。参加した職員は、積極的にコーチング技法を学んでおり、各職場で活用されることを期待させる充実した研修となりました。

第2回人事交流者懇談会を開催



懇談会の様子

第2回人事交流者懇談会が、12月1日(金)、本部第1会議室において行われました。現在、本学から他機関への人事交流者は45名おり、今回はその内37名が参加しました。

懇談会では、冒頭に佐分理事よりあいさつがあり、続いて事務局各部の幹部職員の紹介、各部の作成した説明資料に基づく近況説明があり、参加した職員は最近の本学の動向について熱心に耳を傾けていました。その後、人事交流者に対する個別ヒヤリングを行い、懇談会は閉会となりました。

引き続き、花の木において、人事交流者懇親会が、事務企画連絡協議会のメンバーと他機関から本学への人事交流者を含む約60名の参加を得て行われました。懇親会は、終始和やかな雰囲気の中で行われ、人事交流者は久しぶりの名古屋大学でのひとときを有意義に過ごし、今後の活躍を新たに誓い合いました。

講演会「大学における環境安全管理体制の確立に向けて」を開催

環境安全衛生推進本部は、11月29日(水)、IB 電子情報館大講義室において、「大学における環境安全管理体制の確立に向けて」と題した講演会を開催しました。

講演会では、山根 隆環境安全衛生管理室長のあいさつの後、北野利明工学研究科教授が「工学研究科・環境安全管理室この2年間で次のステップ」と題して、法人化以降

2年余の間に安全衛生管理面について総括し、今後の課題について報告しました。

続いて、小山富士雄東京大学環境安全本部副本部長が「大学における環境安全の現状と課題」と題して、国立大学法人化と安全管理体制整備、企業人が見た大学の環境安全管理と問題点、課題解決のための企業経験者の役割について講演を行い、東京大学の具体的な事例を紹介するとともに、企業経験者としての鋭い視点から国立大学の安全管理体制への厳しい注文があり、国立大学法人に作成及び公表が課せられた「環境報告書」の基本思想、作業手順等についても説明しました。

関東、東海・北陸、関西地区の国立大学等の関係者を含め約170名が参加し、環境安全管理の重要性を啓発する、大変有意義なものとなりました。



講演する小山東京大学環境安全本部副本部長

GPS 電波を使った電離圏の観測

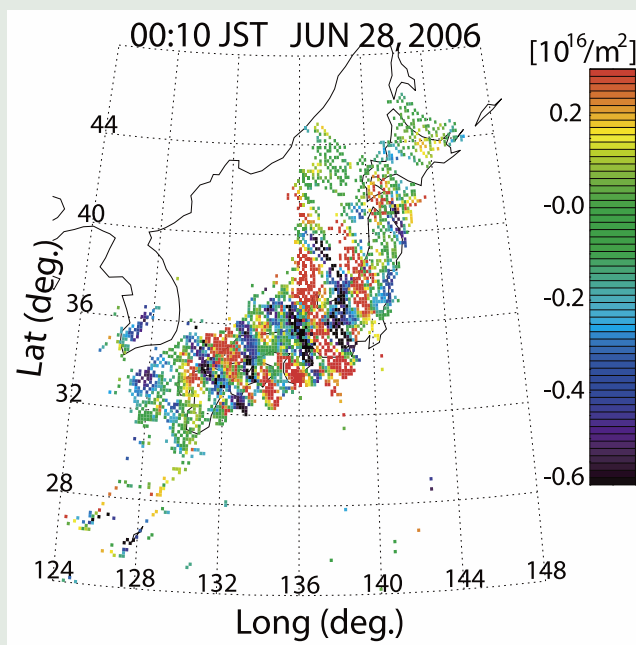
大塚 雄一 太陽地球環境研究所助手

GPS (Global Positioning System; 汎地球測位システム) は、米国が開発した人工衛星による位置決定システムであり、カーナビゲーション・システムにも使われるなど、我々の生活にも馴染みの深いものになっています。日本国内には、精密な測位を行うため 1,200点を越える多数の GPS 受信機が国土地理院によって設置、運用されています。このように多数の GPS 受信機を密に配置しているのは日本だけです。私たちは、この GPS 受信機網のデータを利用して、地球の電離圏に生起する現象を研究しています。

高度約2万 km を飛翔する GPS 衛星から送信された電波は地上に届くまでにプラズマ密度の濃い電離圏を通るため、GPS 電波を使った測位は電離圏の影響を受けます。この影響は、10メートル近い測位誤差をもたらすこともあります。従って、精密な距離測定を行うためには、この電離圏の影響を取り除く必要があります。電離圏による影響の大きさは電波の周波数に依存するため、2つの周波数の電波を使うことによって取り除くことが出来ます。逆に、電離圏による影響だけを取り出すことによって、電離圏プラズマの量を測定することもできます。このプラズマの量は、衛星から受信点までの電波の通り道に沿ったプラズマ密度の足し合わせ (積分値) であることから、全電子数と呼ばれています。

GPS によって観測された全電子数のデータを解析すると、電離圏は一様ではなく、場所によって全電子数の濃淡があり、さらにこの濃淡が移動していることが分かりました。図にその例を示します。この図は、日本上空における全電子数分布のスナップショットを示しています。全電子数の変動の大きさをカラーで表しており、北西から南東にのびる縞は全電子数が高い (あるいは低い) 領域を表しています。この全電子数の変動は、全体の数%程度ですが、大きい時には10%を越えることもあります。

電離圏に伝搬するプラズマ密度の変動は、伝搬性電離圏擾乱として1960年代から知られており、従来から盛んに観測や研究が行われてきました。その結果、伝搬性電離圏擾乱は、大気の波によって引き起こされていると考えられてきました。しかし、GPS 観測によって伝搬性電離圏擾乱の水平二次元構造が明らかになると、従来の考え方ではこの現象を説明できないことが分かりました。現在では、電磁力学的な力によって伝搬性電離圏擾乱が発生していると考えていますが、定量的に説明できる理論は未だありません。私たちは、この現象の原因解明を目指して研究を行っています。



国土地理院 GPS 観測網によって観測された電離圏全電子数の変動を 地図上にプロットしたものの。カラーレベルは、変動の大きさを示す。5つの衛星から得られた全電子数変動の値を地上の GPS 受信機と衛星を結ぶ視線が電離圏高度300km と交わる点にプロットしてある。図中に、北西から南東にのびる縞 (全電子数の変動) がはっきり見られる。

ホウ素系電解質を用いた選択的ナリチウムイオン輸送

松見 紀佳 大学院生命農学研究科助教授

近年のモバイルテクノロジーの急速な進歩には目を見張るものがあります。携帯電話、ノート型コンピュータをはじめ、携帯音楽プレーヤー、PDA、デジタルカメラ、ビデオカメラ、カーナビゲーションシステムなど、我々のライフスタイルに多大な影響を与えていることに気がきます。これらの技術を支えているのは、リチウムイオン二次電池をはじめとする各種二次電池の進歩といえます。最近ではハイブリッド車用の補助電源としても、二次電池への要求は一層増しつつあります。大容量蓄電システムの開発が進めばゴミの焼却熱、夜間電力の他、各種クリーンエネルギーの貯蔵利用の促進にもつながり、開発が進んでいる太陽電池との併用による相乗効果も期待されます。また、電気自動車や電気列車などの未来技術も二次電池の更なる発展に依存しています。

一方で、近い将来、解決が強く望まれる問題として、最近のPC用電池のリコール報道にも見られるような安全性の向上が挙げられます。電池の安全性を改善しつつ、いかにして更なる性能の改

善を進めることができるかが大きな課題となっており、難燃性のイオン液体を電解質として利用した「燃えないリチウムイオン二次電池」の研究が進められています。

二次電池において、その性能の鍵を握る材料の一つが電解質です。理想的なリチウムイオン二次電池においては、電解質中における高速で選択的なリチウムイオン輸送が求められます。

リチウムイオン二次電池用電解質として、これまで最も多年にわたり広く研究されてきた材料にポリエーテルと呼ばれる物質群があります。ポリエーテルは極性の高い酸素原子の存在によって、水と同じように様々な塩を溶解し、生成するイオンを輸送できる高分子です。高校の物理、化学の教科書に出てくるような古典的な電池の電解質を水からプラスチックに置き換えることにより、電解質は水のように揮発や腐食する心配もなく、液漏れの不安も解消され、小型化、軽量化が進んできました。

しかし、従来のポリエーテル系の材料では、極

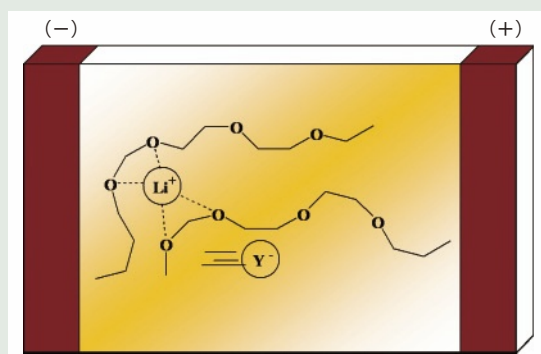


図1. ポリエーテル中におけるリチウムイオン輸送の模式図

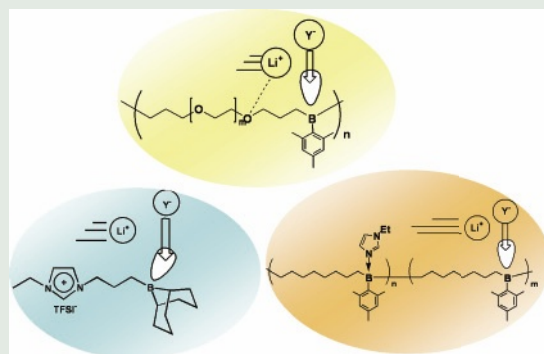


図2. ホウ素系電解質を利用した選択的リチウムイオン輸送 (黒くなっている背景を白にして下さい)

性酸素原子がリチウムイオンと特に強く相互作用するため、常温において大半はエネルギーの発生と直接関係のないマイナスイオンが移動しており、リチウムイオンが移動している割合は1～2割に過ぎませんでした(図1)。そこで、我々はマイナスイオンのレセプターとしてのホウ素原子を導入した各種高分子固体電解質を合成し、リチウムイオンがマイナスイオンよりも優先的に移動する系を構築しました(図2)。

また、今世紀に入ってから盛んに研究されている新たな電解質材料として、前述のイオン液体と呼ばれる物質群があります。イオン液体は高イオン伝導性かつ難燃性であり、より安全性の高い電池を構築する上での電解質用基幹物質として産業界から大いに注目を浴びています。しかし、こ

ちらにも一筋縄ではない問題があります。イオン液体はイオンのみから構成されているため、電位勾配下ではリチウムイオンのような目的イオンのみならず、系の構成イオンも同時に移動してしまいます(図3)。そこで、我々はマイナスイオンのレセプターを有する有機ホウ素系イオン液体を合成しました(図2)。リチウムイオン輸送の選択性がポリエーテル系有機ホウ素電解質よりも更に改善され、これを高分子化した系では移動しているイオンの8割以上がリチウムイオンとなることを見出しました。イオン液体の本質的な欠点に対して解決策を与える方法論として期待しています。

一方、ポリエーテルでもイオン液体でもない第三世代の電解質の候補として液状ホウ素—イミダゾール錯体を開発し、難揮発性電解質及びグリーン溶媒としての利用を提案しています。従来型のイオン液体とは異なり、マトリックスの構成イオンを含んでいないことから、特に選択的なイオン輸送に適していると考えています。

今後もホウ素化学をはじめ、これまでの材料科学に比較的に利用されていない化学を持ち込んだり、さらには様々なバイオソースを利用して新たな材料創製や新機能の発現に結び付けていくことを計画しています。

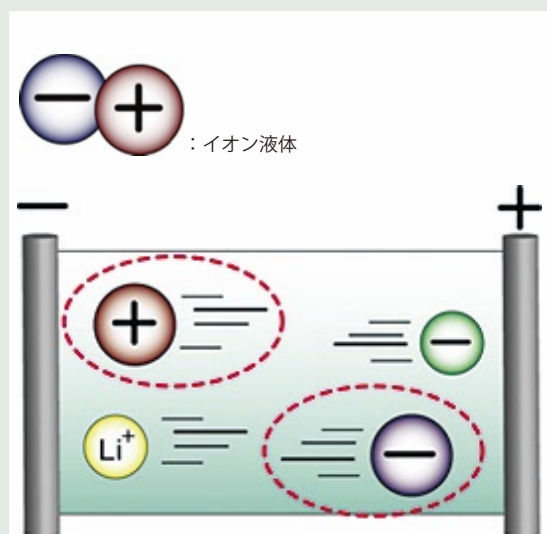


図3. イオン液体中におけるリチウムイオン輸送の模式図

1973年生まれ、1995年京都大学工学部卒業、2000年京都大学大学院工学研究科博士後期課程修了。2000年東京農工大学工学部助手に着任、2004年法人化及び改組に伴い東京農工大学大学院共生科学技術研究部助手。2006年より名古屋大学大学院生命農学研究科助教授。
趣味：読書、旅行など。

まつみ のりよし



メタボリックシンドロームに対する運動療法

押田 芳治 総合保健体育科学センター教授

メタボリックシンドロームとは、腹腔内にある胃や腸の周りに脂肪（内臓脂肪）が、長期にわたり過剰蓄積した結果、血糖値上昇、低 HDL コレステロール血症かつ／または高中性脂肪血症、血圧上昇を複数合併し、動脈硬化症由来の心血管系イベントの易発症性を概念化したものです。また、内臓脂肪の過剰蓄積は、インスリン抵抗性も併発させ、それ自体が高血圧症、高脂血症、冠動脈硬化症を惹起させることもよく知られています。このような過剰に蓄積した内臓脂肪やインスリン抵抗性の改善には運動療法が最も有効であると言っても過言ではありません。そこで、その根拠について、主に私どもの成績を中心に述べ、さらに、具体的な運動療法を提言したいと思います。

(1) 歩行やジョギングで代表される有酸素運動は、糖のみならず遊離脂肪酸（FFA）をエネルギー源とし、脂肪量減少に有効です。さらに、メタボリックシンドロームの原因とされる内臓脂肪は、運動時、皮下脂肪よりも分解されやすい性質を持っており、長期の有酸素運動の継続の結果、内臓脂肪量の減少が確認されています（図1）。

(2) 骨粗鬆症、有酸素運動能力や基礎代謝量などの加齢にともなう低下は、筋力・筋量の減少が大きく影響していることから、レジスタンス運動の併用もメタボリックシンドローム対策の観点から重要視されるようになってきました。

ここで言うレジスタンス運動とは、呼吸を堪える運動と異なり、低負荷、高頻度の筋力トレーニングであり、ダンベル（Dumbbells）、リフティング（lifting）やローイング（rowing）に代表されるものです。歩行を中心とした有酸素運動のみでは効果がみられなかった高齢者に、レジスタンス運動を併用したところ有意な改善を認めています。

(3) 骨格筋においても、脂肪細胞と同様に、サイトカインを分泌します（ミオカイン）。IL-6は、運動筋からも分泌され、脂肪分解、脂肪酸のβ酸化、肝でのグリコーゲン分解の各作用を有し、さらには、TNF-α誘発インスリン抵抗性の減弱、IL-10を介する動脈壁への抗炎症効果も報告されています。ところが、脂肪細胞から放出されるIL-6は、動脈壁の慢性炎症、すなわち動脈硬化に

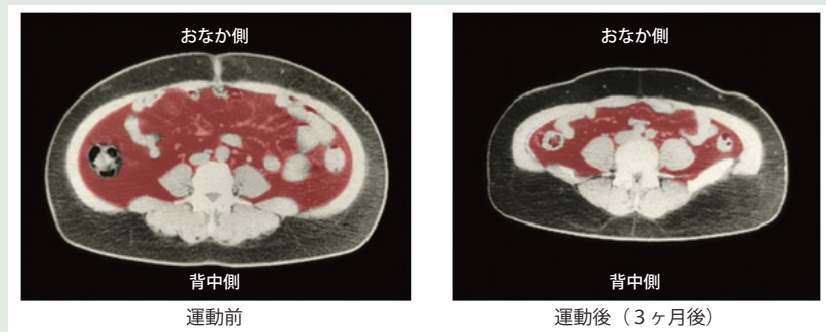


図1 運動療法前後における内臓脂肪の変化

関与することも知られ、IL-6に関しては今後の検討課題です。

(4) 体脂肪量の減少も、メタボリックシンドロームの改善に重要な役割を担っていると思われます。大型の脂肪細胞からは、FFA、TNF- α 、レジスチンなどの分泌増大(図2)およびアディポ

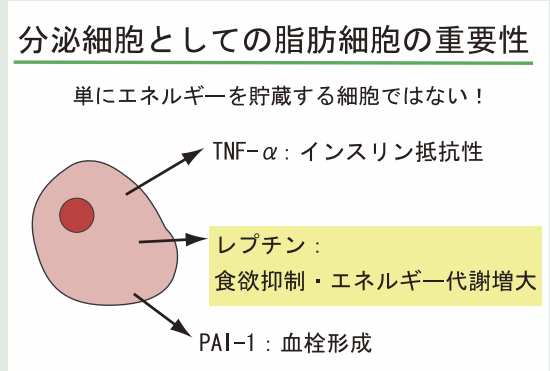


図2

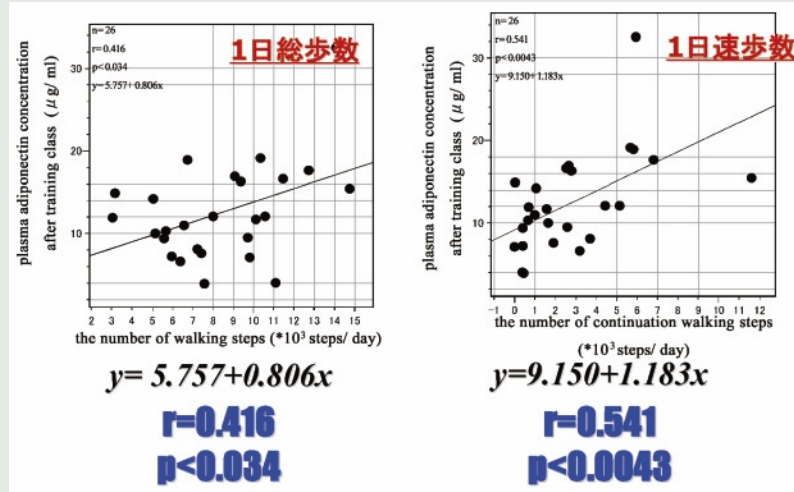


図3 歩数と血中アディポネクチン濃度との関係

ネクチンの分泌低下がみられます。特に、アディポネクチンは動脈硬化症の抑制に関与し、メタボリックシンドロームの重要なサイトカイン(アディポカイン)の一つとみなされています。そこで、中高年女性(55 \pm 8歳)を対象に、3カ月間歩数計を携帯してもらい、1日歩数、1日速歩数と血中アディポネクチン濃度との関連を調査しました。その結果(図3)、血中アディポネクチン濃度と1日の平均総歩数および1日の平均連続速歩数とに各々正相関がみられました($r=0.416$, $p<0.05$, $r=0.541$, $p<0.005$)。また、1日1万歩以上あるいは連続速歩で2千歩(10分)以上の群の血中アディポネクチン濃度の変化量は、それ以下の群に比して有意に大でした($P<0.05$)。

実際、内臓脂肪を毎月1kg(約7000kcal、ウエスト周囲径では1cmに相当)を運動のみで減量するには、1日あたり230~240kcalの運動による

消費が余分に必要となります。歩行なら6000歩/日、サイクリングなら45分/日、ジョギングなら30分/日の運動を毎日行わなくてはなりません。このように、運動療法のみではメタボリックシンドロームの改善に長期間要しますが、食事療法を併用すると一層効果的と言えましょう。

昭和27年4月14日 愛知県生まれ
昭和53年3月 名古屋大学医学部医学科卒業
昭和59年4月 名古屋大学総合保健体育科学センター助手
平成13年5月 同教授
現在に至る。
専門：内科学、特に糖尿病運動療法、スポーツ医学
現在、日本糖尿病学会、日本肥満学会、日本体力医学会、日本臨床スポーツ医学会などの評議員
趣味：旅行、特に温泉、音楽(クラシック)

おした よしはる



地震防災教育の実践

林 能成 大学院環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助手

21世紀になって名古屋の街では「地震防災」がキーワードの一つとなっています。愛知県の広い範囲が「東海地震に係る地震防災対策強化地域」や「東南海地震・南海地震に係る地震防災対策推進地域」に指定され、地震や防災についての話題が毎日のように新聞でとりあげられました。地震保険の都道府県別加入率も愛知県が全国一位になりました。しかしながら、この盛り上がりが一過性のものになってしまえば、真の防災力向上にはつながりません。防災を末永く継続させるには、子供から大人まで様々な年齢層を対象とした防災教育が重要になってきます。ここでは名古屋大学の中で行われているいくつかの取り組みについて紹介します。

■学生向け地震防災ガイドの作成とセミナーの実施

学生に地震防災の基礎知識を取得してもらうため、地震防災ガイドを作成し新入生ガイダンスの中で解説をしています。このガイドは毎年更新されており、学内建物の最新の耐震性も公開しています。

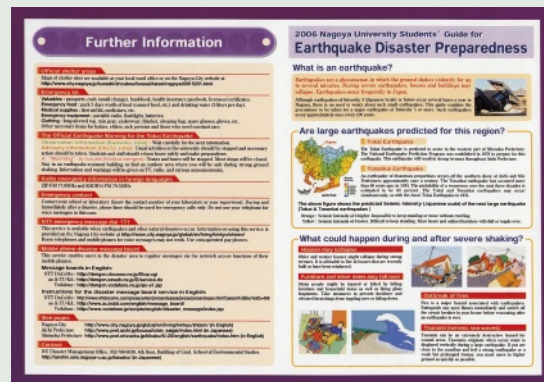
また、名古屋大学では多くの外国人留学生が学んでいます。その中には地震が滅多に起きない国から来ている人もいます。そこで、そのような人を対象にした英語版の地震防災ガイドも作成しました。このガイドを使用した防災セミナーも留学生センターと協力して年に2回程度開催しています。

■地震防災訓練

名古屋大学では2003年度から地震防災訓練を毎年実施しています。これは2万人規模の大学では他に類を見ない試みです。最初の年の訓練内容は

「地震予知情報の伝達」といった簡単なものでしたが、訓練内容を年々充実させています。2006年度には、全学一斉放送を使った情報伝達、名古屋大学ポータルを使った安否確認システムの試験運用、部局災害対策本部の立ちあげ、救急救命講習などを実施しています。

ここで重要なことは、毎年の訓練後に全構成員を対象としたアンケートを実施して、次に取り組みべき課題を明らかにしてきたことです。例えば「名古屋大学で予想される被害状況が明確でない」



留学生向けの英語版地震防災ガイド



2006年度地震防災訓練における防災講演の様子

という意見に応えるため、想定されている揺れの強さや被害状況を解説した資料を作成しました。これを災害対策室のホームページで公開するとともに、防災訓練の前に各部局の教授会で説明もしています。

■部局防災マニュアルの作成支援

大学では全学統一して行うべき防災対策がある一方で、部局毎に異なる事情があるため、それらを反映したマニュアルの整備が欠かせません。またマニュアルを作るプロセスで大学における防災を真剣に考えることになるため、マニュアル作成は教職員への防災教育的側面を持っています。大学院環境学研究科では2006年度の地震防災訓練当日に教員を集めワークショップ形式で災害対応マニュアルのアウトラインを策定しています

■防災アカデミーの開催

災害は時代とともにその様相を変化させてきました。次に起こる災害は我々が想像しているものとは違うものかもしれません。そのため幅広い視点から災害や防災について学び、想像力を養う



環境学研究科で開催された防災マニュアル作成のためのワークショップ



防災アカデミーの開催を知らせるポスター

ことが防災教育の重要な柱です。災害対策室では学内外の様々な専門家を招いて広く市民にも公開した形で防災アカデミーを開催しています。この講演会では耐震工学や地震学といった一般的な内容ばかりでなく、名古屋大学の多彩な研究者ネットワークをいかして多様なテーマを取り上げています。

防災を浸透させるためには、訓練等によって災害場面とその課題を経験し、自分のやるべきことを体得する必要があります。また、防災は大学の中だけで自己完結するものではなく、地域社会や国の施策などとも密接な関連を持っています。その意味で防災研究と防災教育は連続的につながっています。この橋渡しが大学における災害対策室の役目なのでしょう。

大学院環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助手、災害対策室員。

1991年北海道大学理学部地球物理学科卒業後、JR東海にて新幹線の自然災害対策に5年間従事。その後、大学院に入学し2001年東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻博士課程修了、博士(理学)。独立行政法人防災科学技術研究所特別研究員などを経て、2003年から現職。大学院時代の専門は火山地震学であったが、その後は防災を意識した地震学的研究、あるいは地震学のバックボーンを生かした防災研究を進めている。

モットー：エースが手をつけないことをやる

趣味：「現場」に行くこと、ベトナムの旅、新幹線もろもろ

はやし よしなり



大学生が発信する地震防災

「たのしく防災」



瀬戸市防災訓練での様子（06年10月29日）
約40名の小学生を対象に子供向け防災セミナーを行った。
写真は震災シミュレーションゲーム～避難所生活編～を行っているメンバーと小学生。

私は震災ガーディアンズというサークルに所属している。このサークルは、「気軽に防災・楽しく防災」を合い言葉に、地震防災の啓発を目的として活動している。具体的には、防災セミナーの開催、防災イベントへの参加、新たな防災啓発手法・ツールの開発などを行っている。構成しているメンバーは、特に地震や防災の分野に関する学生が多いわけではなく、文学部や経済学部といった文系の学生も所属している。

防災セミナーの対象としてきたのは、災害時要援護者とされる高齢者や小学生、そして大学生である。対象によって内容を変え、できるだけ盛り上がるようなセミナー運営を心がけている。たとえば、高齢者や大学生向けの場合、家の中の危険度を考えるなどのワークショップを行い、小学生

向けの場合はクイズやゲームを多用することになっている。参加者に自ら考え、多くの感動を持ってもらうためである。短い時間に参加者に様々な情報を伝えるのは非常に困難で、ただ知識を詰め込むだけのセミナーは全く楽しくない。参加者が防災に関する楽しいイベントに参加したんだという記憶さえ持ってもらえれば、後は参加者それぞれが知識を得ようになると考えている。

また、新しい防災教育ツールとして「震災シミュレーションゲーム」を開発した。これは、子どもから高齢者までが遊びながら地震防災について学ぶことができるすごろくである。現在までに地震発生前から避難所生活まで5種類のストーリーで進むゲームを開発し、様々なイベントで使用してきた。これまでは私たちが参加するイベントでしか使っていなかったが、最近では全国から問い合わせがあり、貸し出しを始めることにした。多くの人にゲームを体験してもらい、意見や感想を取り入れてゲームの改良や次のゲーム開発をしていきたい。

様々なメディアに取り上げられ、少しずつ社会的認知度が高まってきた私たちではあるが、まだ大学生向けの啓発は十分ではないと考えている。自分の周りの友人を見ても、地震への関心が非常に薄いからだ。阪神大震災では多くの学生も被害にあっている。自分の友人たちを同じ目に合わせないためにも、同世代へ向けた防災啓発活動を考えていきたいと思う。



帰宅困難者体験イベントを開催（06年7月2日）
名古屋駅から名古屋大学までの約9kmの道のりを、帰宅困難者になりきって歩いた。途中、危険になりそうなポイント、支援してもらえそうなポイントを調査した。
写真は、途中オアシス21で集合写真を撮ったもの。

にしむら たけし
1983年生まれ
大阪府出身



名古屋大学体育会は、12月4日(月)、野依記念学術交流館1階会議室において、名古屋大学体育会会長表彰式を挙行了しました。

この表彰は、本学体育会における優秀な個人・団体及びその指導者の栄誉を讃え、その功績を広く顕彰することを目的としたもので、今年で18回目となります。

今年は、11月28日(火)の体育会会長表彰審査会の審査を経た「個人の部」13名、「団体の部」7団体が、本学体育会会長の平野総長から表彰され、1年間のめざましい成績を讃えられました。

なお、受賞者及び受賞団体には、副賞として、名古屋大学校友会から記念品等が贈呈されました。

■個人の部

運動部名	氏名	学部学部・学年	出場大会・成績
弓道部	松川あゆみ	農学部・2年	第16回東海学生弓道女子新人戦 女子個人 優勝
漕艇部	奥村 麻友	経済学部・4年	第38回中部学生ボート選手権大会 女子シングルスカル 優勝
ライフル射撃部	平山 雄斗	工学部・3年	第24回中部学生ライフル射撃伏射大会 10mエアライフル伏射60発競技 準優勝
相撲部	鈴木 博之	工学部・4年	第31回西日本学生相撲体重別選手権大会 75kg未満級 準優勝
フィギュアスケート部	関谷 雄飛	理学部・4年	第35回中部学生氷上競技大会 フィギュア競技の部 Aクラス男子 優勝
ボクシング部	堀 心一	医学部・2年	第45回中部学生ボクシング選手権大会 ライト級 優勝
アーチェリー部	三仙 真也	文学部・4年	第27回北信越国民体育大会 アーチェリー競技 成年男子個人 3位
陸上競技部	金尾 洋治	指導者(監督)	第67回東海学生駅伝競走大会 優勝 第18回出雲全日本大学選抜駅伝競走 18位
舞踏研究会	小島 健児 飯田亜里紗	工学部・3年 医学部・3年	第42回中部日本学生競技ダンス選手権大会 八種目戦団体戦 優勝
舞踏研究会	神谷 真人	工学部・4年	第42回中部日本学生競技ダンス選手権大会 種目別戦 クイックステップ 優勝
			第42回中部日本学生競技ダンス選手権大会 種目別戦 タンゴ 優勝
			第42回中部日本学生競技ダンス選手権大会 種目別戦 ワルツ 優勝
			第33回中部日本学生競技ダンス選手権大会 モダン戦 優勝
ヨット部	河崎 祐輝 渡邊 淳史	法学部・2年 経済学部・3年	2006年度中部学生ヨット個人選手権大会 国際スナイブクラス 優勝

■団体の部

運動部名	出場大会・成績
ライフル射撃部	第24回中部学生ライフル射撃伏射大会 10m エアライフル伏射60発競技 優勝
陸上競技部	第67回東海学生駅伝競走大会 優勝
	第18回出雲全日本大学選抜駅伝競走 18位
	第45回全国七大学総合体育大会 陸上競技女子 5連覇
アーチェリー部	2006年度東海学生アーチェリー選抜選手権大会 男子団体 優勝
	2006年度東海学生アーチェリー個人選手権大会 男子団体 優勝
航空部	第45回全国七大学総合体育大会 7連覇
相撲部	第24回全国国公立大学対抗相撲大会 2連覇
舞踏研究会	第42回中部日本学生競技ダンス選手権大会 種目別戦 優勝
	第42回中部日本学生競技ダンス選手権大会 八種目戦団体戦 優勝
	第37回中部日本学生競技ダンス選手権大会 学年別戦 団体戦の部 優勝
	第33回中部日本学生競技ダンス選手権大会 モダン戦 優勝
漕艇部	第38回中部学生ボート選手権大会 女子総合 優勝
	第38回中部学生ボート選手権大会 男子総合 優勝
	第38回中部学生ボート選手権大会 男子舵手付フォア 優勝
	ジャパンカップ第28回全日本軽量級選手権大会 エイト 8位

「環境学研究科創設5周年記念式典及び同附属交通・都市国際研究センター設立記念シンポジウム」を開催



ロバートセルベロ学科長による基調講演の様子

大学院環境学研究科は、11月24日(金)、環境総合館レクチャーホール等において、同研究科創設5周年記念式典・祝賀会を挙行了しました。この記念式典は、同研究科が環境をテーマとする我が国初の本格的な文理融合型の研究科として、平成13年4月に創設されて5周年を迎えたことによるものです。また、同日、持続可能な交通と都市を築き上げるための研究を国際的連携の下で推進すべく、平成18年4月に設立された同附属交通・都市国際研究センターの設立記念シンポジウムも併せて開催されました。

まず、交通・都市国際研究センター設立記念シンポジウムが、環境総合館レクチャーホールにおいて、「交通と都市の持続のための技術と政策」をテーマに開催されました。基調講演では、ロバートセルベロ カリフォルニア大学バークレー校都市地域学科長が「公共交通と持続的都市：世界の経験」と題し、アジア大都市圏での公共交通政策について、また、重松 崇トヨタ自動車株式会社常務役員が「人と自動車の未来」と題し、人による運転の安全支援の先端技術開発の見通しについて講演し、240名の参加を得



ラウンジに設けられたパネル展示、著書の紹介コーナー



式辞を述べる林研究科長

ました。

午後は、安井 至国連大学副学長及び浅野直人福岡大学法学部教授をコーディネータとして、「交通技術と研究の展望」及び「交通・都市政策と研究の展望」をテーマにパネルディスカッションが行われました。中央官庁や研究機関、産業界から招かれたパネリストが、研究への取り組みやニーズを紹介するとともに、センター教員からも研究内容が紹介され、その目指すべき研究の方向性について活発な議論が交わされました。

引き続き、同研究科創設5周年記念式典が、102名の参加を得て挙行されました。林同研究科長による式辞、平野総長のあいさつに続き、来賓祝辞として、辰野裕一文部科学省大臣官房審議官、小林 光環境省官房長、稲垣隆司愛知県副知事、松原武久名古屋市長、土屋良文中部経済連合会常務理事事務局長、ジョン ブラック シドニー大学教授から、同研究科における今後の研究教育・社会貢献に対する様々な期待や激励の言葉がありました。

式典終了後、グリーンサロン東山で開催された祝賀会では、山本理事によるあいさつの後、同研究科の創設に尽力した松尾 稔前総長・名古屋都市センター理事長による祝辞、清水哲太トヨタホーム株式会社代表取締役会長による乾杯の発声があり、続いて、イスラム カーン特任教授、藩海嘯同済大学教授によるスピーチが行われました。また、同済大学学長、UCバークレー交通研究所長、世界資源研究所交通センター長、世界交通学会会長からのメッセージが伝えられ、85名にも及ぶ出席者は、和やかに歓談しました。

「プラズマナノ工学研究センター設立シンポジウム」を開催

●大学院工学研究科



あいさつする澤木工学研究科長



あいさつする平野総長

大学院工学研究科は、12月14日(木)、IB電子情報館大講義室において、プラズマナノ工学研究センター設立シンポジウムを開催しました。本シンポジウムは、平成18年10月1日付けで同研究科の附属センターとして設置されたプラズマナノ工学研究センターの設立に伴い開催されたものです。

同センターは、文部科学省21世紀COEプログラム「先端プラズマ科学が拓くナノ情報デバイス」を中心とするプラズマ関連の研究成果を結集し、さらに発展させるために設立された国内初の低温プラズマに関する研究センターで、ナノテクノロジー・材料分野の戦略的基幹技術であるプラズマ技術の研究開発を進め、人材の養成を図るとともに、プラズマナノ工学の世界的研究拠点の形成により、産学連携・地域連携並びに国際連携を促進することを目的としています。

シンポジウムでは、澤木工学研究科長の主催者代表あいさつの後、平野総長から本学におけるプラズマ研究の経緯及びセンターに対する期待が述べられ、菅井センター長からセンター設立の背景、経過、組織、拠点活動等について説明が行われました。引き続き、特別講演として廣瀬全孝産業技術総合研究所次世代半導体研究センター長から「半導体技術の将来動向と産学官連携戦略」、また、来賓講演として保坂重敏東京エレクトロン株式会社技術開発セン

ター長から「プラズマ装置産業の動向と産学連携への期待」、石丸典生愛知・名古屋地域知的クラスター事業本部長から「知的クラスター創成事業と地域連携への期待」と題した講演が行われました。

午後からは、河野明廣、財満鎮明、堀 勝、高井 治、水谷 孝、馬場嘉信各同研究科教授・同センター兼任教授から学術に関する報告があった後、産業界との連携協力について菅井センター長による「センターにおける産学連携の推進」、また、林 俊雄、関根 誠各同センター特任教授による「プラズマプロセスの将来ビジョンとセンターの役割」と題した講演がありました。引き続き行われた総合討論では、同センターの役割や運営方法等について活発に議論され、センターに寄せる期待の大きさが窺われる有意義なシンポジウムとなりました。



センターの概要を説明する菅井センター長



特別講演をする廣瀬氏



来賓講演をする保坂氏



来賓講演をする石丸氏

21世紀 COE プログラム「統合テキスト科学の構築」 国際研究集会を開催

21世紀 COE プログラム「統合テキスト科学の構築」は、11月17日(金)、文系総合館カンファレンスホールにおいて「歴史・地図テキストの生成 テキスト／コンテキスト 2」をテーマに、第10回国際研究集会を開催しました。

本集会は、プロジェクトの“歴史テキスト部門”が中心となって開催され、今回は、平成16年9月に開催された第4回 COE 国際研究集会の続篇にあたるものです。

集会では、町田文学研究科長によるあいさつの後、プロジェクト代表者の佐藤彰一 研究科教授による「メロヴィング期聖人伝における地誌記述についての考察」と題した

発表、フランス国立科学研究機構のアルメル クリアン博士による「中世アルル周辺における水力利用施設の配置」と題した発表、また、地図研究の第一人者で国際的に著名なパトリック ゴーチュ＝ダルシェ 国立パリ高等研究院教授による「中世における地図表象」と題した発表が行われました。

続いて、フランソワ ブガール パリ第10大学教授による「9～11世紀イタリアにおける裁判一件記録生成とコンテキスト」と題する発表、西村善矢 同研究科 COE 研究員による「10～11世紀サン・サルヴァトーレ修道院における記録作成の変動」と題する発表があり、最後に、金尾健美川村学園女子大学教授が、「1420年ディジョンで執筆された書簡に見る貨幣と貨幣政策」について報告し、学問的に実り豊かな1日になりました。



あいさつする佐藤教授



講演するアルメル クリアン博士

国際シンポジウム「国家・社会の変容と法改革」を開催

●大学院法学研究科、法政国際教育協力研究センター

大学院法学研究科及び法政国際教育協力研究センターは、12月9(土)、10日(日)の2日間、文系総合館カンファレンスホールにおいて、国際シンポジウム「国家・社会の変容と法改革」を開催しました。

このシンポジウムは、現在アジア及び欧米で起こっている国家・社会の変容と、そこでの法改革の現状を明らかにし、グローバル化の下で進行する法改革を巡る各国共通の特徴を明らかにする目的で開催されたものです。

1日目は、計画経済から市場経済へ移行する過渡期における国家・社会の変容と、その中での法改革をテーマに報

告及び議論が行われました。2日目は、「WTO とそれをめぐる紛争解決と国内法整備の課題」、「グローバル化の中での法の支配と立憲主義の確立」、「市場経済化にともなう社会の変容と法整備の課題」を検討するため、それぞれ分科会に分かれ活発な議論が行われました。

シンポジウムには、100名を超える参加があり、国外からは、中国、ベトナムといった市場経済を志向する東アジアの社会主義国、韓国、ASEAN 諸国といったアジア地域、すでに市場経済の移行を終え EU への加盟を果たしたハンガリー、さらには欧米においてこの種の研究経験が豊富なスウェーデンなど12ヶ国、14機関、18名が参加し、日本・アジア・ヨーロッパの研究者の国際ネットワークを構築するよい機会となりました。



会場の様子



記念撮影

第2回感覚設計国際シンポジウムを開催

●大学院情報科学研究科

大学院情報科学研究科は、11月16日(木)、17日(金)の2日間、野依記念学術交流館において、感覚設計国際シンポジウムを開催しました。本シンポジウムは、昨年3月に引き続き2回目の開催で、同研究科の専攻を横断する形で、同研究科の秋庭史典助教授、鈴木泰博助教授、三輪和久教授、茂登山清文助教授が中心となり企画されたもので、“感覚設計”をキーワードに、アートと情報科学との相互交流を通じて、新たな研究領域とその手法を拓く可能性を目指して行われました。

シンポジウムでは、著名な美学者であるとともに、優れ

た実践者でもあるリチャード シュスターマン フロリダアトランティック大学教授の講演「身体で考える」をはじめ、国際的に活躍するゲストアーティストである近藤哲也氏の講演とライブ、櫃田珠実氏のインスタレーション展、また、基調講演、研究発表、ギャラリートーク、ワークショップ等が行われ、ディスカッションでは、感覚設計の理論的背景と今後の展開について熱心に議論され、いくつかの具体的な視点が提案されるなど、学術領域と表現領域とが融合した大変意義深いプログラムとなりました。



講演するシュスターマン教授



櫃田氏の作品を鑑賞する参加者

情報系 COE が「第4回社会情報基盤のための音声・映像の知的統合シンポジウム」を開催

情報系 COE は、12月7日(木)、8日(金)の2日間、IB電子情報館大講義室において、「第4回社会情報基盤のための音声・映像の知的統合シンポジウム」を開催しました。情報系 COE は、平成14年度に採択された21世紀 COE プログラム「社会情報基盤のための音声・映像の知的統合」の推進組織であり、末永康仁情報科学研究科教授をリーダーに、大学院情報科学研究科、大学院工学研究科、情報メディア教育センター、情報連携基盤センター等に所属する情報科学を専門とする教員によって構成されています。今年度は、同プログラムの最終年度であり、今回は5年間

に渡って推進された教育研究の最終成果報告を目的に開催されました。

シンポジウムでは、平野総長、山本理事、澤木工学研究科長、阿草情報科学研究科長のあいさつ、プログラム委員長の間瀬健二情報連携基盤センター教授による概要説明に始まり、8件の招待講演を含む25件の講演及び39件のポスター発表が行われました。特に、マルチメディア標準化を強力に推進しているレオナルド キャリリオーネ MPEG 議長、人工知能の父と呼ばれ、日本国際賞も受賞されているマーヴィン ミンスキー教授による招待講演は、世界的にも極めて著名な研究者ということもあり、会場が溢れるほどの盛況ぶりでした。学内外から483名もの参加があり、議論や意見交換が活発に行われるなど、参加者の関心を大いに集め、同プログラムの研究成果が十分に示されるものとなりました。



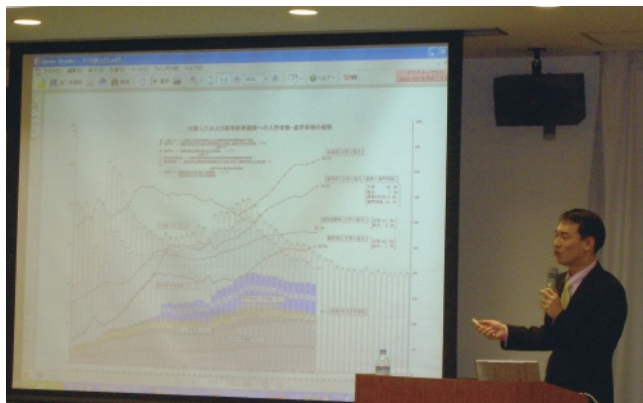
ミンスキー教授(柱の左)と末永教授(柱の右)



キャリリオーネ MPEG 議長

留学生のための就職支援セミナー (第3回)を開催

●大学院国際開発研究科



講演する小澤氏

大学院国際開発研究科は、12月5日(火)、同研究科多目的オーディトリウムにおいて、留学生のための就職支援セミナーを行いました。

今回は、4回予定されている本セミナーの第3回目で、就職支援を専門とするキャリア・ディベロップメント・アドバイザーの小澤 彰氏より、少子高齢化の進展から人材確保が困難、また、新卒学生の質の低下、といった状況から留学生の採用は拡大傾向にあるが、企業によって特定の能力を期待する場合もあれば日本人学生と同様に採用する場合もあるため、企業の規模を問わず幅広く就職活動するべき、というアドバイスがありました。また、少子高齢化の中で、今後我が国が競争力を維持していくためには、積極的に留学生の採用を進展するべきであり、共に日本社会を支える一員として受け入れていくべきだ、との意見も出され、盛況の内に終了しました。

第4回(最終回)では、元留学生で現在日本企業において就職されている方の体験談などが予定されています。

テレビ会議を通じた海外実地研修報告会を実施

●大学院国際開発研究科



王立ブノンペン大学とのテレビ会議の様子

大学院国際開発研究科は、12月6日(水)、同研究科多目的オーディトリウムにおいて、カンボジア王立ブノンペン大学とテレビ会議を通じた海外実地研修報告会を行いました。

海外実地研修とは、「魅力ある大学院教育」イニシアティブのプログラム「国際開発分野における自立的研究能力の育成」の一環で、学生が教員とともに開発途上国に赴き、現地調査の研修を受ける取り組みのことで、今回は学術交流協定締結校である王立ブノンペン大学の協力を得て、平成18年9月にカンボジアで実施されました。

報告会では参加学生が研修後グループごとにまとめた研修報告書に基づき王立ブノンペン大学の研修協力者とテレビ会議を通じて議論しました。本報告会におけるテレビ会議の導入は今回が初めてで、同研究科の学生による研修結果のプレゼンテーションをスクリーン画面に映し出し、王立ブノンペン大学の学生と教員から様々なフィードバックを得て、活発な議論が行われ、実地研修を現地で支えている協力校との学術交流を深める上で大きな貢献となりました。

講演会「高病原性トリインフルエンザについて」を開催

●大学院生命農学研究科



説明する鈴木教授

大学院生命農学研究科は、12月5日(火)、農学部A館において、平成18年度名古屋大学総長裁量経費プロジェクト「鳥類の感染症抵抗性に関する国際共同研究」の一環として、「高病原性トリインフルエンザについて」の講演会を開催しました。

講演では、講師である鈴木康夫中部大学生命健康科学部教授から、我が国をはじめアジアで発生したトリインフルエンザによる被害状況、変化するトリインフルエンザの仕組みとトリから豚やヒトへの感染、感染防御研究の緊要性と薬品開発の難しさなど、今後の研究展開にとって興味深い話が紹介されました。教員、大学院学生など50名近くの参加者は、熱心に聴講し、予定時間を超えての質疑応答がありました。

第12回理学懇話会

「生命の『核』を衝く－X線でみるタンパク質の動的構造－」を開催

●大学院理学研究科

大学院理学研究科は、12月2日(土)、シンポジオンホールにおいて、第12回名古屋大学理学懇話会「生命の『核』を衝く－X線でみるタンパク質の動的構造－」を開催しました。

この懇話会は毎年2回開催しているもので、今回は一般の方を含む約60名の参加がありました。

懇話会では、まず神山 勉同研究科教授による「光で動くプロトンポンプ」と題する講演が行われ、約35年前に古細菌から発見された光駆動プロトンポンプを例に挙げて、



講演する前田教授



講演する神山教授

動的構造の解明についての研究を紹介し、X線を使った構造解析について、最新の方法を説明しました。

続いて、前田雄一郎同研究科教授による「タンパク質分子の動態と機能の関係－動きがおかしいタンパク質は病気を起こす?－」と題する講演が行われ、心臓の筋肉であるタンパク質“トロポニン”の変異が心臓病を引き起こすことから、トロポニンの動きを知ることでその働きが明らかになるのではないか、等の疑問に対し、医学的な視点を含めての解説をしました。

研究の成果を上げるまでのエピソード等も交えた話は、参加者にとって、研究を身近に感じることであった様子で、懇話会終了後も、活発な質疑応答が行われました。

なお、本懇話会の様子は、理学広報誌「理 Philosophia」第12号(4月発行)の特集として掲載される予定です。

ノーベル物理学賞受賞 Gerardus't Hooft 教授一般講演会を開催

●大学院理学研究科

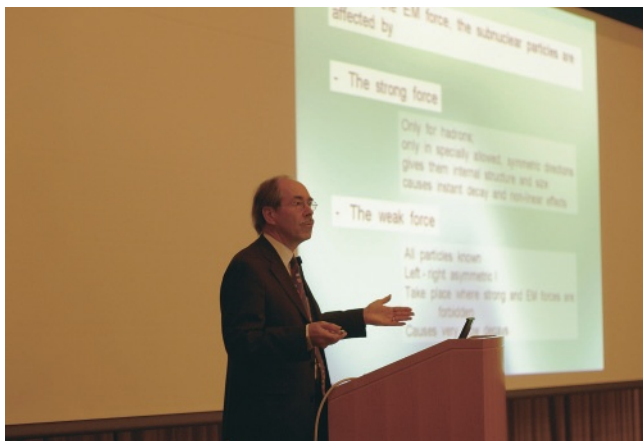
大学院理学研究科は、11月23日(木)、シンポジオンホールにおいて、Gerardus't Hooft (ゲラルド・ト・フーフト) ユトレヒト大学教授による講演会を開催しました。

同教授は、1999年に「素粒子の電弱相互作用の量子論的構造の解明」でノーベル物理学賞を受賞した上、自然界の3つの基本的な力に関する「標準模型」全体の量子論的基

礎を構築する等、素粒子論のあらゆる分野の根幹を支える業績を残しています。今回は、日本学術振興会の「著名外国人研究者招へい事業」により来学しており、11月21日(火)から24日(金)にかけて本学において行われた、素粒子論の国際会議「質量の起源と強結合ゲージ理論」及び11月25日(土)、26日(日)に行われた、「坂田模型50年国際シンポジウム」にも出席しました。

講演会では、同教授が「The Smallest Building Blocks of Matter」と題した講演を行い、同教授の学生時代である1969年当時においての物質最小単位としての素粒子に対する認識から、現在の最先端の知識と今後の展望についてまで幅広く解説しました。

当日は、国際会議の出席者や、教員、学生、一般社会人等、約200名の参加があり、参加者は同教授の話に魅了されていました。



講演するトフーフト教授

「第8回まちとすまいの集い」を開催

●大学院環境学研究科

大学院環境学研究科都市環境学専攻建築学教室は、11月18日(土)、環境総合館レクチャーホールにおいて、「第8回まちとすまいの集い」を開催しました。

今回は、昨年の耐震強度偽装事件により、建築の安全性と、建築家、建築技術者が果たすべき責任への関心が高まっているこの機会に、住まいや街の安全を脅かすリスクについて知り、専門家が果たすべき役割と市民や使用者のリスクに対する心構えについて考えようと、「まちとすまいの安全・安心」をテーマにし、講演会と同時に、ロビーにおいて、建築学系の研究・教育の内容及び活動を紹介するパ

ネル展示を行い、学外からの参加者42名を含む66名の参加がありました。

第1部の講演では、森 保宏同研究科教授が「安心して暮らすためのリスクマネジメント」について、谷口 元工学研究科教授が「デザインにおけるユーザー参加と専門家の役割」について話しました。また、株式会社ウッドフレンズの松浦和雄氏が「実際の家づくり街づくり」について、実際に参加された『高森台の家』プロジェクトを紹介しながら木造住宅の完成までの過程を詳しく話し、名古屋市役所の辻 喜光氏が「建築法規のかかわり方」について、名古屋市の行政としてのこれまでの対応と今後の展望について紹介しました。

第2部のパネルディスカッションでは、西澤泰彦環境学研究科助教授のコーディネートにより、第1部の講演者をパネリストとして、街と住まいの安心・安全に対する議論を深めました。



パネルディスカッションの様子 (左から、森教授、谷口教授、松浦氏、辻氏、西澤助教授)



パネル展示の様子

大学院学生主催の国際学会「FeedForth 2006」を開催

●留学生センター

国際・学際学会「FeedForth2006」が、11月16日(木)、17日(金)の2日間、国際開発研究科カンファレンスホール等において開催されました。本学会は、留学生センター共催のもと、本学の大学院学生が企画、主催したもので、多様な分野の研究者たちが自由な雰囲気の中で人的ネットワークの構築を図ることを目的としています。

基調講演では、森際康友法学研究科教授、サム エドワーズ同研究科講師、ハイジック ジェームズ南山大学教授による基調講演が行われ、研究者の進む方向や連携、精神性、世界との関係などについて深く考えさせられる話に、参加

者は感銘を受けた様子でした。

参加者は、多国籍・多分野の企画委員8名と発表者16名を含め、約60名あり、“自由”、“建設的批判精神”、“十分な討論”、“発表間の連携”、という目標に沿って学会を進め、熱心な討論が繰り広げられました。

今後も毎年 FeedForth の開催を予定しており、留学生センターは、今後も学生の主体的な企画を支援していきます。

詳しくは、<http://www.ecis.nagoya-u.ac.jp/en/info/ff06.html> をご覧ください。



発表を熱心に聞く参加者



インドネシアの教育について発表する日本人大学院学生

「ボクのワタシの秘密基地づくり」を開催

●大学院環境学研究科

親と子の建築講座「ボクとワタシの秘密基地づくり」が、11月25日(土)、豊田講堂東の雑木林内において開催されました。これは、千種区の「文教地域の学習環境づくり」事業の一つである「千の種あかし隊」の活動として行われたもので、大学院環境学研究科の「都市環境学地域貢献実習」としても位置づけられており、昨年に続き2回目となりました。



秘密基地で遊ぶ参加者

す。今回の企画に当たっては、小松 尚同研究科助教授を中心に、同研究科博士課程前期課程の学生が主体的に取り組み、小学生とその保護者20組(約60名)に加えて、名古屋市立大学、愛知県立芸術大学、本学の学生が参加しました。

当日は、グループに分かれて相談しながら、樹木に竹を差し掛けて作った見晴台や太い竹を束ねた長い滑り台を作ったり、ロープをつり下げてターザンごっこをしたり、と参加者、学生が一緒になってキャンパスの森の中で楽しく過ごしました。

参加した親子からは、「名古屋大学のキャンパス内にこんな場所があるとは思ひもなかった、また訪れたい」という声が多く聞かれました。

今後も、東山キャンパスを地域の財産として、また、優れた学びの素材として活用し、地域に開かれた大学として、このようなイベントに取り組んでいく予定です。

公開講演会「人工衛星から雲と雨を観る」を開催

●地球水循環研究センター

地球水循環研究センターは、12月9日(土)、シンポジオンホールにおいて、第6回公開講演会「人工衛星から雲と雨を観る」を開催しました。

講演会では、上田同センター長のあいさつに続き、中村健治同センター教授の司会進行のもと、井上豊志郎気象庁気象研究所気象衛星・観測システム研究部第4室長、井口俊夫情報通信研究機構電磁波計測研究センター環境情報センシング・ネットワークグループリーダー、増永浩彦同センター助教授、高藪 縁東京大学気候システム研究センター助教授の4名が、気象衛星「ひまわり」等の静止軌

道衛星が捉えた雲画像の解説や、日米協力のもと開発・運用されている熱帯降雨観測衛星(TRMM)が拓いた降水研究の新展開などを紹介しました。

当日はあいにくの雨模様ながら、70名近い参加者を得ることができ、各講演の後に活発な質疑応答が繰り広げられました。台風や竜巻など、豪雨がもたらす自然災害の深刻化が懸念される昨今、人々の雲・降水現象への関心の高さを実感するとともに、研究の現場に携わる大学が果たす役割の重大さを再認識する機会となりました。



あいさつする上田センター長



会場の様子

地球水循環研究センターがユネスコ IHP 研修コースを実施

地球水循環研究センターは、11月27日(月)から12月8日(金)の2週間にわたり、ユネスコ国際水文学計画短期研修事業(IHP 研修コース)の第16回目を実施しました。

今回は「Oceanography Basics (海洋学基礎)」をテーマに、同センターでの3日間の講義と2日間の演習、三重大学練習船勢水丸による伊勢湾での海洋観測実習、愛媛大学沿岸環境科学研究センターへの研修旅行を行い、ユネスコから推薦されたフィリピン、ベトナム、インドネシア、ミャンマー、スリランカ、パプアニューギニアからの7名と大学院環境学研究科の留学生2名の計9名が研修生として

参加しました。

まず講義で、9名の講師により地球の気候変動における海洋の役割を理解してもらうことを目的とした陸水学、海洋物理学、海洋化学、海洋生物学の基礎的な講義が行われ、その後3日間の海洋観測実習を伊勢湾において実施しました。12月の伊勢湾は、風も冷たく熱帯域から来た研修生には非常に厳しい環境でしたが、全員積極的に観測に参加していました。



三重大学練習船勢水丸乗船者と一緒に記念撮影



修了式

シンポジウム「新材料による電気機器の革新」を開催

●エコトピア科学研究所

エコトピア科学研究所エネルギーシステム寄附研究部門は、12月14日(木)、ベンチャービジネスラボラトリー ベンチャーホールにおいて、エコトピア科学シンポジウム「新材料による電気機器の革新」を開催しました。

同研究部門は、将来の最適エネルギーシステムの構築を目指した研究開発の最新動向を広く社会に知ってもらうた

めに毎年数回シンポジウムを開催しており、今回は100名の参加がありました。

環境問題は、現代社会の持続的発展のために避けて通ることのできない重要な問題です。電気機器分野においても環境を意識した様々な技術開発が行われていますが、中でも材料技術はその鍵を握る重要技術の一つとして、大きな期待が寄せられています。現在、新機能や高性能の発現を目指して新材料開発が急速に立上りつつあり、すでに一部のものは次世代機器への適用が始まっています。

シンポジウムでは、特に変配電分野、ナノ材料分野に焦点をあてて開催され、松井同研究所長のあいさつ、大久保仁同研究科教授による基調講演「機器革新における新材料の重要性」が行われた後、株式会社日本 AE パワーシステムズの宮城克徳氏、遠藤奎将本学客員教授、昭和電線ケーブルシステム株式会社の瀬間信幸氏、株式会社東芝の清水敏夫氏、日立マグネットワイヤ株式会社の菊池英行氏による講演が行われ、関係者が一堂に会して活発な議論が交わされました。



シンポジウムの様子

第60回招聘セミナーを開催

●高等教育研究センター

高等教育研究センターは、12月12日(火)、文系総合館311号室において、第60回招聘セミナー「学びの主権者と共に進める教育改善－岡山大の挑戦－」を開催しました。

セミナーでは、まず、夏目達也高等教育研究センター教授のあいさつがあり、その後、橋本 勝岡山大学教育開発センター教授から、岡山大の新しい取り組みについて、紹介がありました。

岡山大学は、学生全員に「学びの主権者」という考え方を浸透させ、教育は大学から一方的に与えられるものではなく、教員・職員・学生が協力しながら一緒に形作ってい

くものという意識を芽生えさせようとしています。この考え方を具現化した、平成17年度文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」にも採択された課題、「新基軸『学生参画』による教育改善システム」では、学生、教員、職員で組織された学生・教職員教育改善委員会が中核を担っており、ここでの正式決定は大学の公的な決定プロセスの俎上に乗れ、いままでに、シラバス・授業評価アンケートの改善や学生発案授業の実現、教養科目における抽選のウェブ化を通じた公正化等様々な提案が実現しています。

会場には、学内外から11名の参加があり、参加者は、サロニックな雰囲気の中、活発に質疑応答するなど自由な意見交換を行っていました。



講演する橋本岡山大学教授



セミナーの様子

第2回東海地区 CSI 事業報告会を開催

●附属図書館

附属図書館は、11月8日(水)、同館多目的室において、情報連携基盤センターと国立情報学研究所(NII)の共催により、第2回東海地区最先端学術情報基盤(CSI)事業報告会を開催しました。本報告会は、NIIが平成17年度から大学等と連携して進めているCSI事業について、その理解と各機関におけるCSI関連事業の情報及び意見交換の場を提供することを目的として開催されているもので、第2回となる今回は、東海地区を中心に全国から78名の参加がありました。

今回は、テーマを「次世代コンテンツ基盤の共同構築事

業 大学における学術機関リポジトリ構築に向けて」とし、異なる立場の3人の講師による講演が行われました。安達淳 NII 開発・事業部長は、「CSI事業と学術機関リポジトリの構築」と題して、事業の全体像とコンテンツ系事業に関するNIIの役割を説明し、伊藤同館長は、「学術機関リポジトリ：図書館の役割」と題して、大学図書館が機関リポジトリ構築に果たす役割についての講演を行いました。佐藤義則三重大学人文学部教授からは、「研究・教育と学術機関リポジトリ：研究者の役割」と題した、研究者の立場からオープンアクセスを中心とした講演がありました。



講演会の様子



パネルディスカッションの様子

引き続き、講師をパネラーとしたパネルディスカッションが行われ、早瀬均同館事務部長の司会のもと、パネラーとフロアの間で、CSI事業の今後の展望、学術機関リポジトリの構築及びオープンアクセスの動向等について活発な質疑応答があり、有意義な報告会となりました。

詳しくは、<http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/dspace/index.jsp> をご覧ください。

企画展「西洋の発見－幕末・維新期の遣外使節と留学生達－」を開催

●附属図書館

附属図書館及び同研究開発室は、11月10日(金)から24日(金)まで(日曜日を除く)、同館展示室において、大学院法学研究科及び大学院経済学研究科との共催により、企画展「西洋の発見－幕末・維新期の遣外使節と留学生達－」を開催しました。

本企画展は、日本とヨーロッパ連合(EU)との交流事業の一環としてEU寄託図書館である国立国会図書館や各地のEU資料センター等で開催されている展示会や講演会の一つとして開催されたもので、日本と西洋諸国とが歴史的な出会いをした幕末から明治初頭にかけての日本の近代

化をテーマとし、明治4年の岩倉遣欧使節団の記録「米欧回覧実記」からオーストリア大使館が作成したパネルを中心に、幕末から明治初頭に欧米に渡航した使節団や留学生が残した著作物の中から、本学が所蔵する記録や日記類、また、経済学図書室が所蔵するEU関連資料等が展示されました。

11月16日(木)には、同館多目的室において、神保文夫法学研究科教授が「幕末・明治の遣外使節と西欧近代法知識の移入」と題し、明治時代の日本が西洋の法体系を取り入れていく過程などについて、関連の展示史料を紹介しながら講演し、学内外から110名の参加者がありました。

本企画展は、当初2週間の開催予定でしたが、話題性のあるテーマである上、期間中約310名の来場者があったため、一部の展示内容を入れ替え、12月27日(水)まで開催を延長しました。



展示会の様子



講演会の様子

「ナメクジウオ類の進化のなぞに迫る」を開催

●博物館

博物館は、12月2日(土)、「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」の一プログラムとして、「ナメクジウオ類の進化のなぞに迫る」を開催しました。

これは、科学研究費補助金による研究成果をわかりやすく発信することを通じて、中学生・高校生に対して学術と日常生活との関わりや学術が持つ意味に対する理解を深める機会を提供することを目的として実施されたもので、本プログラムでは、高校生15名、高校教員3名、一般1名、本学大学院学生1名の計20名の参加がありました。

まず、西川同館長が「進化の事実とその証拠」と題した講義を行い、様々な動物群の中でナメクジウオが占めている歴史的な位置、体の特徴、日本のナメクジウオの分類等について丁寧に解説しました。その後、参加者は固定標本の解剖に取り組み、この動物群の特徴である“鰓孔”、“脊索”、背方にある“神経管”等を観察しました。また、熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター合津マリンステーションの逸見泰久教授の協力で届けられた生きたナメクジウオが泳いでいる様子を観察した後、実際に手で触れてピクピク動く様子を体感しました。

参加者のアンケートでは、「とてもおもしろかった」、「科学に非常に興味を湧いた」、「将来、できれば研究者になろうと思った」、「このような企画に是非参加したい」との意見が大半を占め、博物館のミッションである次世代教育という側面からも、非常に有意義な実習となりました。



ナメクジウオの標本を顕微鏡観察する参加者



ナメクジウオの生態を水槽で観察する参加者

博物館が秋の野外実習を実施

博物館は、11月23日(木)、野外観察園において、秋の野外実習「ドングリからさぐる 古代の知恵・自然の知恵」を実施しました。ドングリの自然史や縄文時代におけるドングリの利用法を、実際に体験しながら学ぶこの実習は今年で4回目になり、今回は小学生9名、社会人9名、大学生5名の参加がありました。



観察園で説明を受ける参加者

午前中は、野外観察園において、アベマキ、コナラ、スダジイ等、ドングリのなる木の見分け方やドングリが木になるまでの生活史を学びました。参加者は、林の中でドングリの木や実に触れ、セミナーハウスに持ち帰ったドングリをルーペで観察しました。様々なドングリと他の植物の実を比べながら、自分では動けない植物がどのように子孫を他の場所へ広げるのか説明を受け、普段は気づかない植物の知恵に驚いた様子でした。

午後からは、セミナーハウスにおいて、縄文人が食べていたドングリ団子を作りました。参加者は、実際に縄文時代の遺跡から出土した石器を使って、乾燥したドングリを砕いて殻をとり、粉にした後、ひき肉や卵を混ぜてダンゴ状にして茹でたものを試食しました。作る際に、石器を使用したため石の粉が混入しており、食べるると少しジャリジャリする上、味もあまりありませんでしたが、縄文時代には調味料がほとんどなかったため、素材に近い味のものを食べていた、という説明に、参加者は感心して聞き入っていました。

参加者は、各々感想を話し合いながら、楽しくドングリや縄文時代について学んだようで、ドングリ団子を家族へのお土産にと、大切に持ち帰る姿も見受けられました。

博物館が第65回特別講演会を開催

博物館は、11月25日(土)、第65回特別講演会「書物と髑髏」を開催しました。

これは、第9回博物館企画展「本に貼られた小さな美の世界 蔵書票」をより深く理解するための連続講演会の第3回目で、通常は平日に開催されますが、来場者アンケートでの要望に応え今回は土曜日に開催し、約40名の参加が

ありました。

講演会では、前野みち子国際言語文化研究科教授が「書物と髑髏」と題し、近・現代の蔵書票に現われる〈死〉とその中世的ルーツについて、多数の作品を紹介しながら説明しました。同教授は、「中世では、ドクロや骸骨は『死を忘れるな(メメント・モリ)』、『現生は虚飾(ヴァニタス)』という言葉に表されるように、『人生は虚しいものだ』というキリスト教の教えの象徴でしたが、現代では、医学関係者の蔵書票にドクロが使われていても、近代医学=知性によって“死”を遠ざけるという絵柄のなかで使われているため、“死”の勝利ではなくて、“詩”(=知性)の勝利と言えるのかもしれない」と話し、絵柄が示す意味を詳細に読み解くという蔵書票の醍醐味に満ちた講演に、参加者は熱心に聞き入っていました。



講演会の様子

附属農場 動物塚で動物慰霊祭を実施

●大学院生命農学研究科



参列者による献花の様子

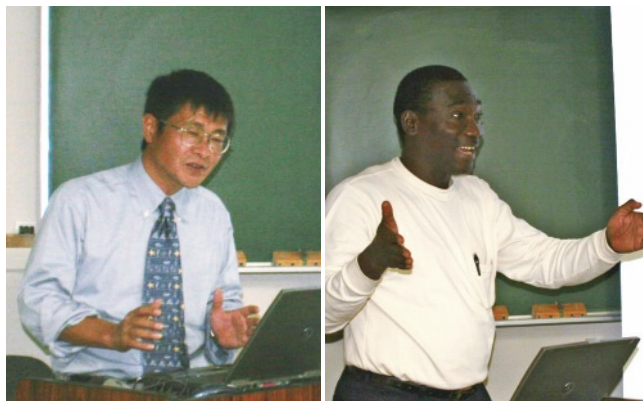
平成18年度の動物慰霊祭が、12月6日(水)、大学院生命農学研究科附属農場の動物塚において、教職員、大学院学生、学部学生等約125名の参列のもと、実施されました。

本慰霊祭は、昭和50年12月8日、当時の農場長の宗像 桂農学部教授の尽力で附属農場に建立された動物塚で初めて執り行われて以来、毎年12月8日前後に実施されているものです。

式典では、まず、松田同研究科長が、動物慰霊祭の歴史と教育・研究に供された多くの動物に対し感謝の言葉を述べ、各層の代表者による「供穀の儀」及び「献花の儀」が執り行われました。続いて、参列者全員による献花が行われ、最後に、動物実験委員会委員長の織田鉄一同研究科教授が、今年度教育・研究に供された動物に対し慰霊の言葉を述べました。

ICCAE 2006年度第6回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター



講演する (左) 南雲氏、(右) パスカル氏

農学国際教育協力研究センター (ICCAE) は、12月11日(月)、生命農学研究科会議室において、2006年度第6回オープンセミナーを開催しました。

まず、南雲不二男国際農林水産業研究センター熱帯・島嶼研究拠点主任研究員が、石垣島におけるマメ科作物をカバークロップとした実験を基に、不耕起栽培保全農業の土壌流亡や土壌肥沃度低減対策としての可能性及びアフリカに眠るリン鉱石資源の有効利用について語り、続いて、同拠点リサーチフェローのパスカル ホンナンダン ベニン国アボメイカラビ大学講師が、自国における土壌生産力の減退とそれに対する有機物施用の効果や、根粒菌や菌根菌など土壌微生物の利用による対策技術の開発研究の現状などについて、農家圃場における実験を基に詳しく話しました。

約20名の参加者があり、農家への技術普及が重要であるという指摘がなされるなど、議論が盛り上がりました。

9.21 ニューメキシコ大学学長等

ニューメキシコ大学学長ほか関係副学長等が、我が国の国立大学と学術交流を進めるために来日されたことを機に訪問され、本学の産学間における研究動向、学術交流の可能性等について意見交換が行われました。



10.12 在ウズベキスタン日本国大使

在ウズベキスタン日本国大使がウズベキスタン共和国の現状について説明するとともに、法整備支援について意見交換するため、本学を訪問されました。



10.31 韓国・高麗大学校校長等

韓国・高麗大学校校長ほか関係部局長が、高麗大学校と本学医学関係者による医学分野の相互交流について意見交換するため、本学を訪問されました。



10.31 張慶龍南京大学教授、J. マンチュクモンゴル科学技術大学助手

張慶龍南京大学教授とJ. マンチュクモンゴル科学技術大学助手が、第2回名古屋大学博物館国際フォーラムへの参加を機に来日され、本学を訪問されました。



11. 9 華中科技大学学長等

華中科技大学学長ほか関係部局長が、我が国の大学と学術交流を進めるために来日されたのを機会に訪問され、本学との学術交流・学生交流、国際交流活動のあり方等について意見交換が行われるとともに、本学の先端研究関係施設を視察されました。



11.15 復旦大学学長等

復旦大学学長ほか関係部局長が、全学間協定に基づく学術交流について意見交換するため、本学を訪問されました。



受賞者一覧

教員

受賞日	受賞名	所属・職名	受賞者	備考
H17.10. 8	第47回天然有機化合物討論会 奨励賞	大学院理学研究科助手	高村 浩由	
H18. 2. 9	井上科学振興財団2005年度研究奨励賞	物質科学国際研究センター 助手	北 将樹	
H18. 6. 1	「電波の日」東海総合通信局長表彰	エコトピア科学研究所教授	片山 正昭	
H18. 6.12	米国電気電子学会 通信ソサイエティ2006年 最優秀解説論文賞	エコトピア科学研究所 助教授	山里 敬也	Abbas Jamalipour (シドニー大学教授)、 和田忠浩 (静岡大学講師) と連名
H18. 6.27	米国航空宇宙協会 最優秀論文賞	エコトピア科学研究所教授	北川 邦行	Gupta.A.K. (米メリーランド大学教授)、 加藤敦史 (大学院工学研究科 D3) と連名
H18. 7.12	International Review of Finance, Asian Finance Association Prize	大学院経済学研究科教授	加藤 英明	
H18. 7.20	CIGRE 最優秀日本論文賞	エコトピア科学研究所 客員教授	遠藤 奎将	他 5 名と連名
H18. 8. 3	2005年度日本認知科学会 論文賞	エコトピア科学研究所教授	古賀 一男	三輪和久 (大学院情報学研究科教授)、 寺井 仁 (附属図書館助手) と連名
H18. 8. 4	2006PC カンファレンス 優秀ポスター賞	大学院情報科学研究科教授	安田 孝美	
H18. 9. 8	第50回粘土科学討論会 日本粘土学会奨励賞	エコトピア科学研究所助手	笹井 亮	
H18. 9.13	IUMRS International Conference in Asia 2006 Best Paper Award	大学院工学研究科助手	片桐 清文	河本邦仁 (大学院工学研究科教授) 他 4 名 と連名
H18. 9.14	柴田賞	名誉教授	杉崎 隆一	
H18. 9.16	第28回日本生物学的精神医学会、第36回日本 神経精神薬理学会、第49回日本神経化学会大 会 合同年会 優秀演題賞	大学院医学系研究科 特任講師	永井 拓	
H18. 9.16	Outstanding Paper Award of 2005 Journal of Chemical Engineering	大学院工学研究科教授	入谷 英司	向井康人 (大学院工学研究科助教授)、 片桐誠之 (大学院工学研究科助手) 他 1 名 と連名
H18. 9.19	日本機械学会機械材料・材料加工部門 部門賞 (業績賞)	大学院工学研究科助教授	大竹 尚登	
H18. 9.20	電子情報通信学会 基礎・境界ソサイエティ 功労賞	大学院工学研究科助教授	岩田 哲	
H18. 9.20	電気情報通信学会 通信ソサイエティ活動功労賞	エコトピア科学研究所教授	片山 正昭	
H18. 9.23	日本生体医工学会 ベストリサーチアワード	大学院工学研究科教授	生田 幸士	加藤大香士 (大学院工学研究科助手) 他 2 名と連名
H18. 9.24	SCIS & ISIS2006 Recognition Award	大学院工学研究科教授	福田 敏男	
H18. 9.25	日本心臓病学会 Clinical Research Award 最優秀論文賞	大学院医学系研究科講師	井澤 英夫	
H18. 9.25	日本心臓病学会 Young Investigator's Award 優秀賞	医学部附属病院医員	平敷安希博	
H18. 9.27	第2回 (2005年度) 日本動物細胞工学会 奨励賞	大学院工学研究科助手	西島 謙一	
H18. 9.30	丸文学術特別賞	大学院工学研究科教授	川瀬 晃道	
H18.10.11	天然物化学懇話会 第6回奨励賞	物質科学国際研究センター 助手	北 将樹	
H18.10.12	第51回日本口腔外科学会総会 メダルティス賞	医学部附属病院助手	山田 陽一	日比英晴 (医学部附属病院助教授)、 八島明弘 (大学院医学系研究科助手)、 上田 実 (大学院医学系研究科教授) と 連名
H18.10.17	石川カーボン賞	大学院理学研究科教授	篠原 久典	
H18.10.19	斎藤眞賞学術部門賞	大学院医学系研究科教授	吉田 純	
H18.10.19	日本脳神経外科学会学会奨励賞腫瘍部門	医学部附属病院助手	夏目 敦至	
H18.10.20	小島三郎記念文化賞 (第42回)	大学院医学研究科教授	西山 幸廣	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	所属・職名	受賞者	備考
H18.10.20	持田記念学術賞（平成18年度）	大学院医学研究科教授	西山 幸廣	
H18.10.20	Academician of the World Academy of Ceramics	大学院工学研究科教授	河本 邦仁	
H18.10.21	スケジューリング学会 学会賞（学術部門）	大学院情報科学研究科助教授	柳浦 陸憲	剣持光俊（京都大学大学院情報学研究科 M2）、今道貴司（京都大学大学院情報学研究科 D1）、野々部宏司（法政大学工学部助教授）、永持 仁（京都大学大学院情報学研究科教授）と連名
H18.10.25	2006年度グッドデザイン賞	大学院工学研究科教授	福田 敏男	他 1 名と連名
H18.10.25	2006年度グッドデザイン賞	大学院工学研究科教授	生田 幸士	
H18.10.25	平成18年度ユニバーサルデザイン賞	大学院工学研究科教授	福田 敏男	他 1 名と連名
H18.10.26	平成18年度原子力安全功労者表彰	大学院工学研究科教授	久木田 豊	
H18.11. 1	粉生熟技術振興賞	大学院工学研究科教授	河本 邦仁	
H18.11. 1	日本 AEM 学会 著作賞	大学院情報科学研究科助教授	大岡 昌博	樋口俊郎（東京大学教授）、横田真一（東京工業大学教授）、鈴木康一（岡山大学教授）と連名
H18.11. 3	秋の叙勲 瑞宝大綬章	名誉教授、元総長	加藤 延夫	詳細は本誌163号 p.6参照
H18.11. 3	秋の叙勲 瑞宝中綬章	名誉教授	服部 秀三	詳細は本誌163号 p.6参照
H18.11. 3	秋の叙勲 瑞宝中綬章	名誉教授	安達 健五	詳細は本誌163号 p.6参照
H18.11. 3	秋の褒章 紫綬褒章	名誉教授	道家 紀志	詳細は本誌163号 p.6参照
H18.11. 4	2006年日本機械学会 計算力学部門業績賞	大学院工学研究科教授	大野 信忠	
H18.11. 4	日本教育工学会 論文賞	留学生センター講師	佐藤 弘毅	
H18.11. 6	地球電磁気・地球惑星圏学会 大林奨励賞	太陽地球環境研究所助手	三好 由純	
H18.11. 8	原子力・放射線安全管理功労表彰	アイソトープ総合センター教授	西澤 邦秀	
H18.11. 9	Medal of DAAAM (Danube Adria Association for Automation & Manufacturing) International (2006年度大賞)	大学院経済学研究科教授	高桑宗右工門	
H18.11.10	For the Cause of Education	大学院国際開発研究科教授	廣里 恭史	
H18.11.10	第3回 P&I パテントコンテスト パテント・オブ・ザ・イヤー プロセス・テクノロジー部門	大学院工学研究科教授	財満 鎮明	
H18.11.10	第3回 P&I パテントコンテスト パテント・オブ・ザ・イヤー プロセス・テクノロジー部門	名誉教授	安田 幸夫	
H18.11.10	第3回 P&I パテントコンテスト パテント・オブ・ザ・イヤー プロセス・テクノロジー部門	大学院工学研究科助教授	酒井 朗	
H18.11.10	第3回 P&I パテントコンテスト パテント・オブ・ザ・イヤー プロセス・テクノロジー部門	エコトピア科学研究所助手	中塚 理	
H18.11.21	Commercial Potential Award (in the 2006 International Exhibition Contest on Digital Signal Processing Creative Designs)	大学院情報科学研究科教授	横井 茂樹	後藤昌人（大学院情報科学研究科 D3）、周 囲（大学院情報科学研究科 D3）、安田孝美（大学院情報科学研究科教授）と連名
H18.11.25	国際開発学会賞優秀賞	大学院環境学研究科教授	井村 秀文	
H18.11.30	2006年度（第19回）有機合成化学協会研究企画賞（東レ 研究企画賞）	大学院工学研究科助手	波多野 学	
H18.11.30	2006年度（第19回）有機合成化学協会研究企画賞（日本触媒 研究企画賞）	大学院工学研究科助手	菊池 淳	
H18.11.30	Second Asia-Pacific Winter Conference on Plasma Spectrochemistry Poster Award	大学院工学研究科助手	長谷川拓也	
H18.12. 2	地球化学研究協会学術賞（三宅賞）	大学院環境学研究科教授	田上英一郎	
H18.12. 3	Thieme Chemistry Journal Award	大学院工学研究科講師	坂倉 彰	

事務職員・技術職員

受賞日	受賞名	所属・職名	受賞者	備考
H18.11. 3	秋の叙勲 瑞宝重光章	元事務局長	内田 弘保	詳細は本誌163号 p.6参照
H18.11. 3	秋の叙勲 瑞宝双光章	元医学部附属病院放射線部 診療放射線技師長	近藤 智昭	詳細は本誌163号 p.6参照
H18.11. 3	秋の叙勲 瑞宝単光章	元医学部附属病院看護部 看護師長	足立きぬ糸	詳細は本誌163号 p.6参照
H18.11. 8	原子力・放射線安全管理功労表彰	大学院医学系研究科 教務職員	濱田 信義	
H18.11.21	医学教育等関係業務功労賞	医学部附属病院准看護師	荒木 悦子	
H18.11.30	日本放射線安全管理学会 研究奨励賞	アイソトープ総合センター 技術職員	近藤 真理	

学生

受賞日	受賞名	所属・学年	受賞者	備考
H18. 5.13	2006年度日本図学会大会 研究奨励賞	大学院情報科学研究科 M2	吉澤 大輔	
H18. 5.15	日本化学会第86回春青年会「学生講演賞」	大学院理学研究科 D3	北村 誠	
H18. 7. 9	日本カリキュラム学会研究奨励賞	大学院教育発達科学研究科 D2	野木森三和子	
H18. 7.29	第25回 IUPAC 天然物化学国際会議ポスター賞	大学院理学研究科 D3	Eric R. O. Siwu	
H18. 8. 4	2006PC カンファレンス 優秀ポスター賞	大学院情報科学研究科 M1	近藤 真由	
H18. 8.21	Best Industry-Related Paper Award	大学院情報科学研究科 M2	佐藤 准嗣	高橋友和（日本学術振興会特別研究員）、 井手一郎（大学院情報科学研究科助教授）、 村瀬 洋（大学院情報科学研究科教授）と 連名
H18. 8.23	2006年度日本熱電学会 講演奨励賞	大学院工学研究科 D1	杉浦 健二	
H18. 9. 9	日本混相流学会年会講演会 学生優秀講演賞	大学院工学研究科 M2	佐竹 真吾	
H18. 9. 9	日本混相流学会年会講演会 学生優秀講演賞	大学院情報科学研究科 D2	出川 智啓	
H18. 9.11	IUMRS International Conference in Asia 2006 Best Paper Award	大学院工学研究科 M2	吉田 敬典	尹龍變（大学院工学研究科 D3）、 島津徳文（大学院工学研究科 M1）、 井上泰志（エコトピア科学研究所助教授）、 齋藤永広（大学院工学研究科助教授）、 高井 治（エコトピア科学研究所教授）と 連名
H18. 9.13	第58回日本生物工学会 優秀学生発表賞	大学院工学研究科 M1	川澄 珠世	
H18. 9.14	2006年日本液晶学会討論会 虹彩賞	大学院工学研究科 M2	早田 祐貴	
H18. 9.16	日本金属学会 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M2	倉永 知英	鷹羽秀隆（大学院工学研究科 M1）、 齋藤永広（大学院工学研究科助教授）、 井上泰志（エコトピア科学研究所助教授）、 高井 治（エコトピア科学研究所教授）と 連名
H18. 9.19	日本セラミックス協会 第19回秋季シンポジウム シンポジウムポスター奨励賞	大学院工学研究科 M2	中嶋 好史	志村哲生（エコトピア科学研究所助手）、 坂本 渉（エコトピア科学研究所助教授）、 余語利信（エコトピア科学研究所教授）と 連名
H18. 9.20	日本機械学会 フェロウ賞	大学院情報科学研究科 D1	周 逸如	
H18. 9.21	溶接学会若手会員の会 ポスター発表賞	大学院工学研究科 D1	尾崎 仁志	
H18. 9.22	日本分析化学会第55年会 学生奨励賞	大学院工学研究科 M2	脇田 佳典	
H18. 9.22	日本分析化学会第55年会 学生奨励賞	大学院工学研究科 M1	深井 拓	
H18. 9.27	第16回インテリジェント・システム・シンポジウム FAN Symposium '06 ベストプレゼンテーション賞	大学院工学研究科 M2	山代 大輔	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	所属・学年	受賞者	備考
H18. 9.29	第92回日本医学物理学会大会 最優秀ポスター賞	大学院医学系研究科 M2	角谷 倫之	田伏勝義（医学部保健学科教授）、 塩田泰生（大学院医学系研究科 M2）、 捩垣智博（大学院医学系研究科 M1）他 3 名と連名
H18. 9.30	第70回日本脳神経外科学会中部支部学術集会 優秀論文賞	大学院医学系研究科 D3	伊藤 元一	
H18.10. 8	第43回日本地域学会 学会賞（奨励賞）	大学院経済学研究科 D3	篠崎 剛	
H18.10.27	JAWS2006 学生奨励賞	大学院情報科学研究科 M2	藤田 幸久	鳥海不二夫（大学院情報科学研究科助手）、 石井健一郎（大学院情報科学研究科教授） と連名
H18.11. 8	MHS2006 Best Poster Award	大学院工学研究科 D3	劉 剖	福田敏男（大学院工学研究科教授）他 1 名 と連名
H18.11. 8	MHS2006 Best Poster Award	大学院工学研究科 D2	肥田 博隆	式田光宏（エコトピア科学研究所助教授）、 福澤健二（大学院工学研究科助教授）、 佐藤一雄（大学院工学研究科教授）他 4 名 と連名
H18.11.10	ATA 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M2	東又 崇晃	石田康行（エコトピア科学研究所助手）、 北川邦行（エコトピア科学研究所教授）、 長谷川達也（エコトピア科学研究所教授）、 中村 仁（東邦ガス株式会社）と連名
H18.11.13	第37回中部化学関係学協会支部連合秋季大会 VIP 賞	大学院工学研究科 D2	伏見 真	
H18.11.13	第37回中部化学関係学協会支部連合秋季大会 VIP 賞	大学院工学研究科 D1	塩見 拓史	
H18.11.13	第37回中部化学関係学協会支部連合秋季大会 VIP 賞	大学院工学研究科 M2	稲垣 智彦	
H18.11.14	APCE2006 Springer POSTER AWARD	大学院工学研究科 D2	小野島大介	
H18.11.26	12th Symposium of Young Asia Biochemical Engineers' Community Best Ph . D . Student Oral Presentation Award	大学院工学研究科 D1	伊野 浩介	
H18.12. 2	留学生による日本語スピーチコンテスト 最優秀賞	大学院国際言語文化研究科 D1	李 金然	

* 受賞者の所属・職名又は学年は、受賞当時

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年11月16日～12月15日]

記事	月日	新聞等名
1 本学とヴィッツ 車載用 OS 開発へ：高田広章・情報科学研究科教授とヴィッツは、国内では初となる自動車制御システム用基本ソフトの開発に着手	11.16 (木)	日刊工業
	11.30 (木)	中日 (朝刊)
2 レターの三枚目：6年前から塩村耕・文学研究科教授がリーダーを務める「岩瀬文庫資料調査会」が、愛知県西尾市の「岩瀬文庫」について全蔵書の点検、研究、データベース化を進めている	11.15 (水)	日経 (夕刊)
	11.16 (木)	
	11.17 (金)	
	11.18 (土)	日経 (朝刊)
	11.21 (火)	日経 (夕刊)
	11.22 (水)	
3 「名古屋大学東京フォーラム～ものづくり中部の未来像～」が、12月12日に開催	11.24 (金)	
	11.17 (金)	中日 (朝刊)
	11.17 (金)	中日 (朝刊)
	11.17 (金)	日経 (朝刊)
	11.17 (金)	日刊工業
4 平野真一総長が座長を務める愛知県科学技術会議が16日開かれ、最先端技術の研究機関「知の拠点」計画の中間案が報告された	11.17 (金)	中日 (朝刊)
5 タンパク質伸縮を解明：前田雄一朗・理学研究科教授らの研究チームは、細胞の運動などに重要なたんぱく質「アクチンフィラメント」を制御する仕組みを解明	11.17 (金)	中日 (朝刊)
		日経 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年11月16日～12月15日]

記事	月日	新聞等名
6 馬場嘉信・工学研究科教授、館知也さん・本学大学院生らはマイクロチップで血中の薬物濃度を迅速に測定する技術を開発	11.17 (金)	日刊工業
7 「いじめ問題の本質隠す」：中嶋哲彦・教育発達科学研究科教授は、衆議院を通過した教育基本法改正案について、「いじめなど社会問題の責任を家庭に押しつけることになるのではないかと指摘	11.17 (金)	中日 (朝刊)
8 道路課金制度を名古屋市で実現するために、森川高行・環境学研究科教授が代表を務める産官学による研究会が発足	11.17 (金)	中日 (朝刊)
9 びわ湖大学駅伝 東海の意地見せるか：本学は招待校として出場	11.17 (金)	読売
10 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 諸難救済の観音菩薩	11.19 (日)	中日 (朝刊)
11 がんと神経難病テーマに講演会：祖父江元・医学系研究科教授が、「がんに効く薬で神経難病が治せるか？—がんと神経難病の関係」をテーマに講演	11.20 (月)	読売
12 数理ウェブ：大沢健夫・多元数理科学研究科教授が「iは地球を救うのか?」、鈴木紀明・同科助教授が「評価とランク付けの数理」と題して講演	11.20 (月)	中日 (朝刊)
13 「不思議な錯覚体験 『脳!』展」関連イベント：辻敬一郎・本学名誉教授は、「錯覚は、必要な情報を取り出す経験の中でつくられた仕組み」と話した	11.19 (日)	読売
14 びわ湖大学駅伝：本学は総合12位、中村高洋さん・本学大学院生が3区で区間最高	11.19 (日)	読売
15 南極観測50年で12月3日講演会：藤井良一・太陽地球環境研究所教授が「神秘の光のオーロラ」をテーマに講演	11.21 (火)	中日 (朝刊)
16 終わらない「未履修」：中嶋哲彦・教育発達科学研究科教授が、「受験編重で、感動などを学ぶことが失われようとしている」と指摘	11.21 (火)	中日 (朝刊)
17 「名古屋大大学院環境学研究科附属交通・都市国際研究シンポジウム」24日開催	11.21 (火)	中日 (朝刊)
18 第12回名古屋大学理学懇話会 声明の「核」を衝く エックス線でみるタンパク質の動的構造：神山勉・理学研究科教授、前田雄一郎・理学研究科教授が講演	11.21 (火)	中日 (朝刊)
19 時のおもり：総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授 形式編重で目的忘れるな	11.21 (火)	中日 (朝刊)
20 仕事の臨場感が味わえる 漫画 安野モヨコ作「働きマン」：小林さやかさん・本学学生の書評	11.21 (火)	中日 (朝刊)
21 女性ホルモンに伴う健康問題 適度な運動が大切：後藤節子・医学系研究科教授が講演	11.22 (水)	読売
22 江戸面白本の世界：塩村耕・文学研究科教授 俠客の自叙伝 興行界の実話 率直に	11.22 (水)	中日 (朝刊)
23 平成18年度医学教育等関係業務功労者文部科学大臣表彰：荒木悦子・医学部附属病院看護部准看護師、今井すが子・地域医療センター医療技術部臨床検査技師	11.22 (水)	朝日 (朝刊) 読売
24 ウィルあいちフェスタ交流会「自分以外はバカの時代」：速水敏彦・発達科学研究科教授が基調講演	11.22 (水)	中日 (朝刊)
25 火山内部 宇宙線で探れ：粒子線を捕らえ、火山内部の様子をX線写真のように撮る技術を本学と東京大学地震研究所が進めている	11.22 (水)	朝日 (夕刊)
26 気球で望遠鏡打ち上げ：國枝秀世・理学研究科附属南半球宇宙観測研究センター教授ら 数時間分の観測データを地上局で取得	11.22 (水)	中日 (夕刊)
27 科学フォーラム福岡「創造的若者へ！科学者からのメッセージ」：理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授が基調講演	11.23 (木)	読売
28 平野真一総長が委員長を務める愛・地球博記念公園内の理念継承エリアについて検討する県の検討委員会は、エリアを「テーマゾーン」と「記念ゾーン」で構成する県の基本計画を了承	11.23 (木)	読売
29 「生命の『核』を衝く—X線でみるたんぱく質の動的構造」2日本学シンポジウムで開催	11.23 (木)	朝日 (朝刊)
30 訃報：後藤重朗・本学名誉教授	11.23 (木)	朝日 (朝刊) 他2社
31 時時刻刻 スパコン最速奪還せよ：理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授が開発実施本部長に就任	11.24 (金)	朝日 (朝刊)
32 核の怖さ伝えていく：本学OBでつくる「戦後60年を考える会」主催 米・ロサンゼルス在住の芥川賞作家、米谷ふみ子氏が「9・11以後、私がアメリカで見るもの考えること」をテーマに講演	11.24 (金)	中日 (朝刊)
33 アメフト東海学生入れ替え戦リーグ戦最終結果：本学2位	11.24 (金)	朝日 (朝刊)
34 グランドワーク東海10周年記念フォーラム：竹谷裕之・生命農学研究科教授が講演	11.26 (日)	中日 (朝刊)
35 アイスホッケー名古屋6大学選抜 米の大学と親善試合：本学からも選手が参加	11.26 (日)	中日 (朝刊)
36 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 十一面観音の小型木彫像 シヴァ神の特徴を継ぐ	11.27 (月)	中日 (朝刊)
37 書籍：『いま活断層が危ない—中部の内陸直下型地震』安藤雅孝・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授、田所敬一・同センター助教、林能成・同センター助手、木村玲欧・同センター助手編著	11.27 (月)	中日 (朝刊)
38 時流読流 人材確保に四苦八苦 愛知 “求人競争”：本学の学生就職内定率は横ばい	11.27 (月)	日刊工業

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年11月16日～12月15日]

記事	月日	新聞等名
39 愛知県は本学と連携し、愛知万博会場跡地に、ナノレベルで物質を解析できる「シンクロトン光施設」を建設する 竹田美和・工学部研究科教授は、「この施設は、素材の開発や、製品の不具合を発見することができる重要なツールになる」と語る	11.28 (火) 11.29 (水)	日経 (朝刊) 日経 (朝刊)
40 名古屋大高等研究院フォーラム 公正な科学研究に向けて一業績評価と研究倫理：総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授らが講演し、本学教授らが加わり討論	11.28 (火)	中日 (朝刊)
41 いまさら聞けない中小企業のための3時間半でわかる会社法セミナー：中東正文・法学部教授が「M & Aと中小企業」と題して基調講演	11.28 (火)	毎日 (朝刊)
42 編集部から：本学女性教員を中心に、高校性や保護者に女性も理系へ進学するよう訴える企画を思案中	11.28 (火)	中日 (朝刊)
43 豊田講堂の起工式が28日に行われた 2008年春まで改修工事	11.28 (火) 11.29 (水)	読売 中日 (朝刊)
44 江戸面白本の世界：塩村耕・文学研究科教授 昔も変わらぬ政治腐敗 悪代官登場	11.29 (水)	中日 (朝刊)
45 田上英一郎・環境学研究科教授が、「海洋溶存有機物研究の分子レベル的展開」の研究で、地球化学研究協会学術賞の三宅賞を授章	11.28 (木)	中日 (夕刊)
46 12月16日 コロニー自閉症シンポジウム2006が開催：尾崎紀夫・医学系研究科教授が講演	11.30 (木)	中日 (朝刊)
47 「本に貼られた小さな美の世界 蔵書票」12月23日まで本学博物館で開催	11.30 (木) 12.14 (木)	朝日 (夕刊) 朝日 (夕刊)
48 身近な活断層：田所敬一・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助教授 跡津川断層帯 山崩れは同じ場所でも繰り返すことが多いため、堰き止め湖による災害にも十分な注意が必要	12. 1 (月)	中日 (朝刊)
49 南極観測50年：藤井良一・太陽地球環境研究所教授が「神秘的の光のオーロラ」をテーマに講演	12. 1 (月)	中日 (朝刊)
50 「医療安全ワークショップ」7日開催：上田裕一・医学系研究科教授が座長を務める	12. 1 (金)	朝日 (朝刊)
51 竜巻予報いつの日か：坪木和久・地球水循環研究センター教授は、佐呂間町の竜巻の際、ドップラーレーダーで巨大な積乱雲である「スーパーセル」内の竜巻低気圧をみついていた	12. 1 (金)	朝日 (夕刊)
52 2007年度の学生募集要項を1日に発表	12. 2 (土)	中日 (朝刊) 読売
53 「東海学生刑法学会討論会」3日開催：本学を含む愛知県内の6大学の法学部刑法ゼミ対抗で、刑法の事例問題について法解釈を競う	12. 2 (土)	読売
54 バドミントン 東海大学選手権最終成績：本学男子3勝2敗で3位	12. 2 (土)	朝日 (朝刊)
55 病院の実力 専門医少ない 脳血管内治療：宮治茂・医学系研究科教授の2005年1月～12月の治療実績 脳血管内治療数208件 破裂動脈瘤31件 未破裂動脈瘤42件 頸動脈ステント66件	12. 3 (日)	読売
56 留学生による日本語スピーチコンテストで李金然さん・本学大学院生が最優秀賞に	12. 4 (月)	中日 (朝刊)
57 第68回東海学生駅伝競走大会：本学Aチームは、3位に	12. 3 (日) 12. 4 (月)	中日 (朝刊) 他2社 中日 (朝刊)
58 名大サロンの主役：森郁恵・理学科学研究科教授 学習・記憶する線虫	12. 5 (火)	中日 (朝刊)
59 研究室発：田所敬一・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助手 地殻の動きの観測について語る	12. 5 (火)	中日 (朝刊)
60 「天文学講演会 手作り望遠鏡で宇宙を見よう」10日開催：福井康雄・理学研究科教授が「初めての望遠鏡からNANTEN 2まで」と題して講演	12. 5 (火)	中日 (朝刊)
61 「愛知学院大第9回モーニング・セミナー」12日開催：吉村崇・生命農学研究科助教授が「生物はいかにして季節を読み取っているか」と題して講演	12. 5 (火)	中日 (朝刊)
62 「公正な科学研究に向けて一業績評価と研究倫理」5日開催：総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授らが講演し、研究成果の評価の締め付けが、研究の不正を招いていることを指摘	12. 6 (水)	中日 (朝刊)
63 江戸面白本の世界：塩村耕・文学研究科教授 名古屋の“記録魔”学者 家族、奉公人、ペットまで	12. 6 (水)	中日 (朝刊)
64 「日本書紀」の天文記録 信頼性に差：河鱈公昭・本学名誉教授らの研究で、書記の筆者により信頼度の差があることが分かった	12. 6 (水)	朝日 (夕刊)
65 老年学：井口昭久・医学系研究科教授 長寿は遺伝、環境も影響	12. 7 (木)	朝日 (朝刊)
66 宇宙のごみ除去研究：佐宗章弘・工学研究科教授 宇宙空間に漂うごみをレーザーで除去する方法を研究	12. 7 (火)	中日 (朝刊)
67 平野眞一総長が選考委員を務める第20回中日産業技術賞の受賞技術・製品が決まる	12. 8 (金)	中日 (朝刊)
68 中央防災会議の「東南海、南海地震等に関する専門調査会」が、中部圏の内陸直下型地震の震度を予測した。安藤雅孝・地震火山・防災研究センター教授、鈴木康弘・同センター教授は、内陸直下型地震への警鐘をならす	12. 8 (金)	朝日 (朝刊) 読売
69 「生涯学習支援アドバイザー養成講座」16日開催：今津孝次郎・教育発達科学研究科教授が講演	12. 8 (金)	中日 (朝刊)
70 リチウムイオンの電池の日本勢の不具合の背景には、高容量化があると佐野充・環境学研究科教授が指摘	12. 8 (金)	日経 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年11月16日～12月15日]

記事	月日	新聞等名
71 医師不足に対応するために東海市が病院連携提案：医師を派遣する本学などの関係者などで構成する諮問機関の設置を想定	12. 8 (金)	中日 (朝刊)
72 本学でカンボジアでの研修報告会開催：国際開発研究科と、カンボジア王位プノペン大学がテレビ画像を通して行った	12. 7 (木)	毎日 (朝刊)
73 親睦会費を計930万円着服した元本学課長補佐に、8日名古屋地裁は、全額支払いを命じる判決を言い渡した	12. 8 (金) 12. 9 (土)	中日 (夕刊) 朝日 (朝刊) 朝日 (朝刊) 読売
74 本学は、2005年度の特許収入が全大学のトップ「第2の青色LED」としてプラズマ研究が期待されている	12. 9 (土)	朝日 (朝刊)
75 「国際化学オリンピック」の準備組織委員長には、理化学野研究所理事長・野依良治・特別教授が就任	12. 9 (土)	日経 (朝刊)
76 1981年の「濃尾地震」の震源域となった根尾谷断層の保存活動を安藤雅孝・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授と岐阜大の研究者が連携し、保存運動を呼び掛けている	12. 9 (木)	中日 (朝刊)
77 研究者と市民が科学的な好奇心を共有する試み：市民から募集した「宇宙の謎」についての福井康雄・理学研究科教授、杉山直・理学研究科教授や大学院生らの第一弾回答を9日からホームページで公開	12. 9 (土)	中日 (朝刊)
78 朝日カルチャーセンター：「見えてきた暗黒宇宙～最新の宇宙論から」 杉山直・理学研究科教授、「ギジル石窟美術の世界」 中川原育子・文学研究科助手、「大宇宙の誕生～『銀河のたまご』からブラックホールの新しい顔まで」 福井康雄・理学研究科教授、「東地中海歴史紀行～エーゲ海トルコの遺跡を訪ねる」 周遠芳幸・文学研究科教授	12. 9 (土) 12.15 (金)	朝日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
79 「不戦のつどい」シンポジウム8日開催：本秀紀・法学研究科教授が講演	12. 9 (土)	朝日 (朝刊)
80 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 中国四川省の毘沙門天 鎧で身固め威風堂々	12.10 (日)	中日 (朝刊)
81 中日新聞を読んで：図解に見る世相の変化 中西久枝・国際開発研究科教授	12.10 (日)	中日 (朝刊)
82 患者中心の脳卒中連携医療について：吉田純・医学系研究科教授、宮地茂・医学系研究科助教授	12.10 (日)	朝日 (朝刊)
83 森郁恵・理学研究科教授、久原篤・理学研究科助手、谷沢欣則さん・本学院生らのグループが、そううつ病に関連している酵素が、特定の神経細胞で働き掛けて動物の正常な行動にかかわっていることを線虫を使った研究で解明	12.11 (月) 12.13 (水)	中日 (夕刊) 日刊工業
84 進む教育改革：本学の「創成型工学教育支援プロジェクト」の創造力と自主性を養うカリキュラム試みの紹介	12.12 (火)	日刊工業
85 「東海体育学研究セミナー」16日開催：布目寛幸・総合保健体育科学センター助教授が「2006ワールドカップサッカードイツ大会を検証する一敗因と未来」と題して講演	12.12 (火)	中日 (朝刊)
86 college mode：尾関雄一郎さん・本学学生 知的な「白衣」文系学生にも流行させたい	12.12 (火)	中日 (朝刊)
87 編集部から：本学は、公正な研究が行われるよう公正研究委員会を設置した 一つ一つの積み重ねが重要	12.12 (火)	中日 (朝刊)
88 「在日朝鮮人作家を読む会」17日開催：浮葉正親・留学生センター助教授が「〈在日〉文学と巫俗(1) 宗秋月」と題して講演	12.12 (火) 12.13 (水)	中日 (夕刊) 朝日 (夕刊)
89 江戸面白本の世界：裕福な隠居の旅行記 芸者遊びも堂々と記す 塩村耕・文学研究科教授	12.13 (水)	中日 (朝刊)
90 第10回「伊勢湾・三河湾を考える会」5日開催：科学技術交流財団理事長・松尾稔・本学名誉教授は、環境先進地域を目指すのなら文化と経験を生かして連携することが大事だと述べる	12.13 (水)	中日 (朝刊)
91 お茶の水女子大学学長・郷通子・本学名誉教授が、総合科学技術会議の有識者議員に内定	12.13 (水)	日刊工業
92 「知の時代を楽しく生きる」10日開催：理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授、北住炯一・法学研究科教授が講演	12.14 (木)	中日 (朝刊)
93 風向計：家森信善・経済学研究科教授 企業を鍛える個人株主の目	12.15 (金)	読売
94 証券税制の軽減延長 妥当：家森信善・経済学研究科教授は、証券税制改正で、株式配当などの税が軽減が延長されたことを妥当するとともに、軽減税率がなくとも、証券に投資する層の育成の重要性を指摘	12.15 (金)	中日 (朝刊)
95 東海地方11月の地震：林能成・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助手	12.15 (金)	読売
96 「競争と格差拡大の『教育改革』」7日開催：中嶋哲彦・教育発達科学研究科教授が講演	12.15 (金)	中日 (朝刊)

名古屋大学環境報告書2006を公表

平成17年4月「環境情報の提供の促進等による特定事業者等の環境に配慮した事業活動の促進に関する法律」（環境配慮促進法）が施行され、本学も環境に配慮した取り組みを促進し、その状況を「環境報告書」として作成、公表することが求められました。

本学では、平成13年“ごみ減量化宣言”を発し、学内の教育・研究活動の結果排出される一般廃棄物の発生を抑制するとともに、分別回収を徹底し、再使用、再利用を促進し、環境負荷の低減に努めており、また、省エネルギーにも取り組むなど、環境配慮促進法が目的とするところをすでに進めています。環境配慮促進法の施行を契機として、これまでの取り組みを見直しさらに環境に配慮した教育・研究活動を推進していくために「名古屋大学環境報告書2006」を作成しました。

本報告書では、本学の環境に配慮した取り組みを「環境方針」として掲げ、学生・教職員が一丸となって推進することとしており、その基本理念及び基本方針は以下のとおりです。

【基本理念】

名古屋大学は、現代人の行動が地球環境と未来の世代に与える影響の重大性を認識し、持続可能な地球環境の保全に積極的に取り組む。

名古屋大学は、人類がこれまで築きあげてきた知的財産を十分に生かしながら、真に尊重すべきことは何かを問い直し、人類と地球の将来を見通す長期的な視野から環境問題を考える。

名古屋大学のすべての構成員は、それぞれの立場に応じて、教育・研究・大学運営・社会貢献のすべての面でよりよい地球環境の実現のための努力を行う。

【基本方針】

- (1) 名古屋大学は、環境問題について正しく理解し適切に対処していくため、人文・社会・自然科学のすべての分野で体系的な取り組みを行う。
- (2) 名古屋大学は、学生に環境問題について正しく理解し考える力を身につけさせ、環境保全において率先して活躍できる人々を養成する。
- (3) 名古屋大学は、環境に関わる大学の施策のあるべき姿を、教職員・学生がともに考えていく。
- (4) 名古屋大学は、自ら環境に及ぼす影響を客観的に把握し、環境負荷削減のための総合的・体系的な対策を行う。
- (5) 名古屋大学は、地域環境や地球環境における諸問題に積極的に関心を持ち、地域社会に根ざすと同時に、国際社会とも連携しながら環境問題について考え、取り組んでいく。

今回の環境報告書は、本学の「環境方針」に基づき、現在までのエネルギー使用量の削減、廃棄物の減量対策、化学物質等の安全管理、グリーン購入の推進など環境配慮の取り組み状況等や、大学での環境教育の取り組み、附属中学校・高等学校での取り組み、学生団体や生協の取り組みについてわかりやすく紹介してあります。

詳しくは、<http://web-honbu.jimu.nagoya-u.ac.jp/fmd/rpt.html> をご覧ください。



5. 環境配慮の計画

名古屋大学では、省エネルギーとグリーン購入の取組など、法令により定められている数値を目標値として以下のような実績の表を作成しました。

取組の区分	具体的な取組	目 標	2005年度実績	自己評価
エネルギー使用量の削減	・冷暖房設備、照明機器、空調機の節電 ・紙の削減 ・省エネ機器の採用など	年間エネルギー消費単位の削減（建物床面積1㎡当たり）を前年度比1%削減	南山地区 3.2%増減 桂陽地区 1.2%増減	△ ○
地球温暖化対策	上記の他 ・軽量化の導入 ・公共交通機関を利用して自動車の使用を控える	2005年度目標温室効果ガスの排出単位の削減（CO2換算、建物床面積1㎡当たり）を2005年度比3%削減	南山地区 2005年度比 8.2%増減 桂陽地区 2005年度比 3.0%増減	△ △
廃棄物減量化対策	・再資源化率を向上する ・資源回収、資源利用により廃棄物を削減 ・オフィスごみを分別し、リサイクルする	分別回収の取組	南山地区 可処分ごみ削減率 前年度比 2.4%増減 桂陽地区 可処分ごみ削減率 前年度比 0.9%増減	○ ○
化学物質の管理	・化学物質管理システムによる全学一元管理	化学物質の管理情報システムの構築	システム構築率30%	○
グリーン購入の推進	・全調達物品の環境配慮	グリーン調達比率 100%	主要品目のグリーン調達率100%	○
環境教育	・職員、学生への環境教育の実施	各種ガイダンス普及活動の実施	新入生ガイダンス、附属学校での環境教育実施	○

【自己評価】 ○：目標達成、△：目標未達成

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

1月23日(火)

場 所：高等総合研究館 6階カンファレンスホール
時 間：17時00分～

第15回高等研究院セミナー

講演者Ⅰ：上村大輔（理学研究科助教授）
講演者Ⅱ：松澤和宏（文学研究科助教授）

[問い合わせ先]

研究協力・国際部研究支援課 052-788-6051

1月23日(火)～2月24日(土)

場 所：博物館展示室
時 間：10時00分～16時00分
休 館 日：日・月曜日
入 場 料：無料

第10回博物館企画展

テ ー マ：「名大キャンパスの野鳥」



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

1月24日(水)

場 所：留学生センター 1階ラウンジ
時 間：16時30分～18時00分

スモールワールド・コーヒーアワー

[問い合わせ先]

留学生センター
高木ひとみ講師 052-788-6118

1月25日(木)

場 所：名古屋銀行協会 5階大ホール
時 間：13時30分～17時40分
入 場 料：無料

東海ものづくり創生プロジェクト あいち健康長寿産業クラスター形成事業 健康長寿シーズ発表会



[問い合わせ先]

産学官連携推進本部 052-788-6001

1月25日(木)

場 所：IB 電子情報館大講義室
時 間：13時30分～

先端融合領域イノベーション創出拠点 「分析・診断医工学による予防早期医療の創成」 キックオフシンポジウム

[問い合わせ先]

先端融合領域イノベーション創出拠点
予防早期医療創成センター
052-789-5499

1月26日(金)

場 所：博物館講義室
時 間：15時00分～16時30分
入 場 料：無料

第67回特別講演会

講演題目：「都会の森に暮らす鳥たちの背景」
講 演 者：佐藤紳司（理学研究科助手）

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

1月27日(土)、2月17日(土)

場 所：経済学部カンファレンスホール
時 間：10時00分～12時00分

オープンカレッジ・自由奔放！サイエンス

講演題目：「大学の紀元と変容」(1/27)
講 演 者：阿曾沼明裕（教育発達科学研究科助教授）

[問い合わせ先]

経済学部・経済学研究科エクステンションサービス

講演題目：「大気化学と地球環境問題」(2/17)
講 演 者：松見 豊（太陽地球環境研究所教授）

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

1月27日(土)～28日(日)

場 所：博物館講義室 (1/27)、市内地下鉄沿線 (1/28)
 時 間：13時00分～17時00分 (1/27)
 9時00分～16時00分 (1/28)
 対 象：小学3年生～中学3年生及びその保護者
 定 員：30名
 参 加 費：700円

第8回地球教室 (親子対象フィールドセミナー)



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

2月7日(水)、2月19日(月)

場 所：文系総合館7階 (予定)
 時 間：16時00分～18時00分

第35回客員教授セミナー (2/7)

講 演 者：吉田 文 (独立行政法人メディア教育開発センター教授)

[問い合わせ先]

高等教育研究センター

夏目達也教授 052-789-5693

第36回客員教授セミナー (2/19)

講 演 者：フライ氏 (メルボルン大学)

2月8日(木)、3月22日(木)

場 所：文系総合館7階 (予定)
 時 間：2月8日 10時00分～12時00分 (第61回)
 2月8日 15時00分～18時00分 (第62回)
 3月22日 10時00分～12時00分 (第63回)

第61回招聘セミナー

講 演 者：マッキネス氏 (メルボルン大学)

第62回招聘セミナー

講 演 者：ケリー・リー・ハリス氏 (メルボルン大学)

[問い合わせ先]

高等教育研究センター

中井俊樹助教授 052-789-5385 (第61回)

夏目達也教授 052-789-5693 (第62回、第63回)

第63回招聘セミナー

講 演 者：ブリキッテ・ベーレント (元ベルリン自由大学教授)

2月10日(土)

場 所：東山キャンパス内
 時 間：9時30分～11時30分
 対 象：一般
 定 員：20名

キャンパス探鳥会

講 師：佐藤紳司 (理学研究科助手)

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

2月20日(火)

場 所：環境総合館1階レクチャーホール
 時 間：17時30分～19時00分
 参 加 費：無料

第27回防災アカデミー

講演題目：「スマトラ津波が人々を襲った衝撃
 -津波の挙動と土地条件-」

講 演 者：海津正倫 (環境学研究科教授)



[問い合わせ先]

災害対策室 052-788-6038

名大トピックス No.164 平成19年1月15日発行

編集・発行/名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町 (〒464-8601)

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

表紙

暖冬らしい柔らかな光が
 差し込む環境総合館ロビー
 (平成18年12月11日)



名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ

(<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>) でもご覧いただけます。

57 後藤新平の自筆書掛け軸—後藤と愛知医学校教師柴田^{しょうへい}邵平—

後藤新平（1857-1929）は、衛生・植民地・都市行政などに大きな足跡を残すとともに、内務大臣や外務大臣などを歴任した、近代日本を代表する官僚・政治家の1人です。

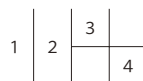
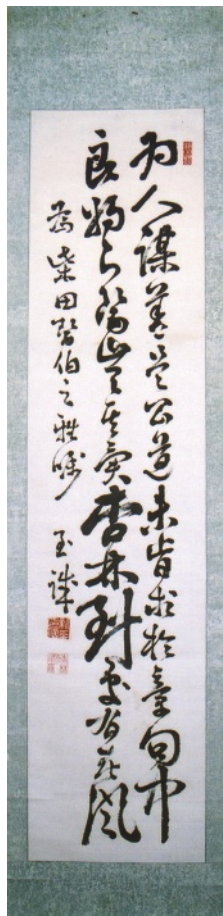
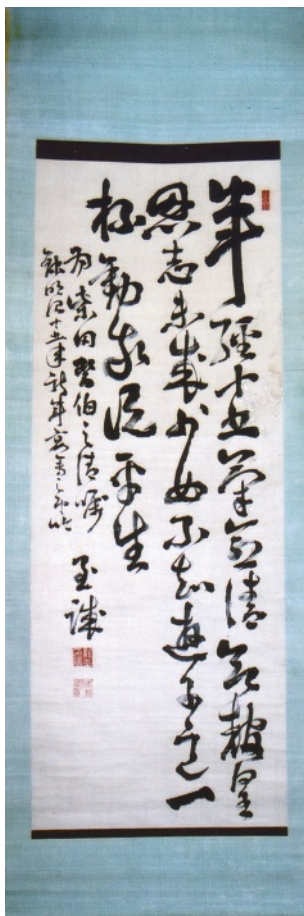
戊辰戦争で明治政府に敵対した水沢藩に生まれて苦学した後藤が、1876（明治9）年に初めて就職したのが、名大医学部の源流にあたる愛知県公立病院（のち愛知病院）でした。そして1881年には、24歳の若さで、愛知医学校長兼愛知病院長に就任しています。83年には名古屋を去った後藤ですが、愛知医学校の基礎を確立し、全国でも有数の医学校とすることに力を尽くしました。

今回紹介するのは、後藤の揮毫書をあしらった2つの掛け軸で、書は愛知医学校時代の後藤が一等助教諭柴田邵平に贈ったものです。いずれも、柴田の子孫の方々が所蔵されています。写真2の掛け軸の裏書に「逋信大臣後藤新平男ノ書」とあることから、後藤が逋信大臣の時期（1908年

から1913年にかけて）に掛け軸にしたものと考えられます。

柴田邵平（1825-1898）は、日本や東海地方の西洋医学・医療の発展に大きな役割を果たした人物です。尾張国で育ち、京都や江戸で西洋医学を学んだあと、1873（明治6）年に名古屋仮病院の当直医となり、その翌年には医学校創立係に任命されて、愛知医学校の創立に深く関わりました。医学校創立後も教員として残り、若い後藤校長を支えました。写真1の書の奥書には、明治15年の「新年宴会」で、後藤が柴田のために即興で詠んだものを献じたとあり、2人の親密さがうかがえます。

所蔵者の1人である柴田義守氏からは、柴田邵平の蔵書や個人資料などからなる、1,000点近い資料が大学文書資料室に寄贈されました。現在、漸次公開を進めつつあります。



- 1 柴田光子氏（玄孫、柴田整形外科院長）所蔵
読み下し文：年経ること十五 気愈々清し、只だ皇恩に報いんとするも志未だ成らず、少女知らず遊子の意、一杯我に勤め平生に沃く
- 2 柴田義守氏（曾孫、元愛知県厚生連海南病院副院長兼整形外科部長）所蔵
読み下し文：人の為に善を謀るは是れ公道、未だ^{おと}背て章句の中に求めず、良将良医豈に其れ異ならんや、杏林到る如花風有り
- 3 愛知医学校長時代の後藤新平（後藤新平記念館所蔵、この頃からヒゲをたくわえはじめた）
- 4 両書に捺された後藤新平の落款（新平印信）
※漢詩の読み下しには、杉山理事の協力を得ました。